

# 宮中の調度

インテリア

— 棚と棚飾り

# 宮中の調度

インテリア

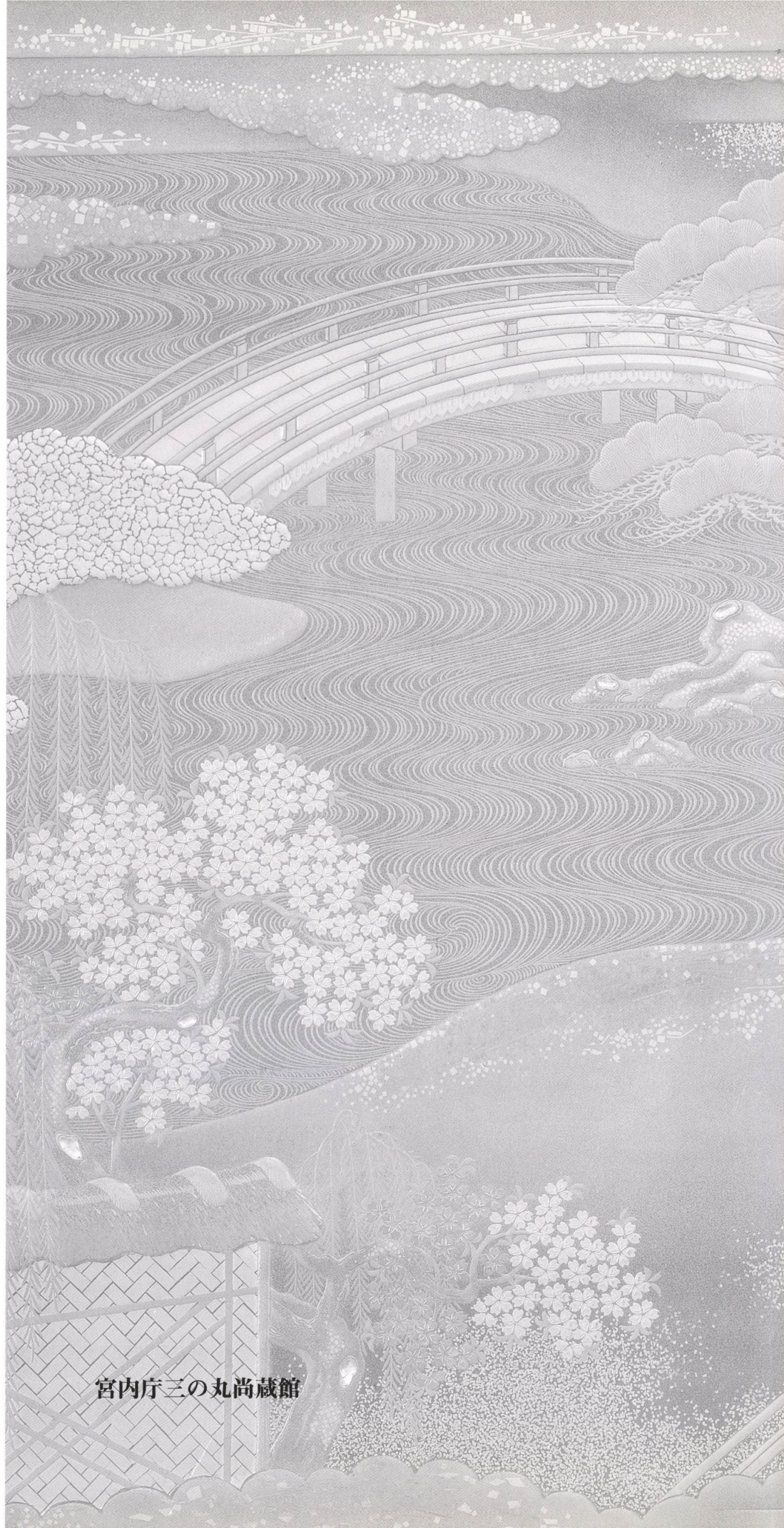
## ― 棚と棚飾り

平成十三年九月二十九日(土)～十二月九日(日)

前期…九月二十九日(土)～十月二十一日(日)

中期…十月二十七日(土)～十一月十八日(日)

後期…十一月二十三日(金)～十二月九日(日)



宮内庁三の丸尚蔵館

目次

3	あいさつ
4	館蔵の棚にみるその在り方の変遷―近世から近代へ
9	図版
68	作品解説
81	参考文献
82	出品目録
iii	List of Exhibits
ii	Foreword

凡例

- 一、本図録は、平成十三年九月二十九日(土)から十二月九日(日)までを会期とする展覧会「宮中の調度―棚と棚飾り」の解説図録である。
- 一、図録掲載の作品のうち、作品番号が付されているものは、展示会場の出品番号と一致する。
- 一、会期中、作品の展示替を行う。
- 一、図録中に掲載した作品のサイズの単位はcmである。
- 一、本展覧会の企画および図録の編集・執筆は、三の丸尚蔵館学芸室員の協力を得て、同研究員五味聖が担当した。
- 一、本図録掲載の写真は、宮内庁嘱託のカメラマンの撮影による。参考図版については東京国立博物館、(株)象彦より提供を受けた。

## あいさし

古くから室内を飾ってきた日本の調度のひとつに棚があります。棚は、収納や、置物を載せるという実用的な役割を担うと同時に、蒔絵や彫刻、飾金具などで彩られることにより、棚それ自体が、室内装飾の中でも重要な位置を占めてきました。

当館には皇室に伝えられてきた棚が数多く収蔵されています。その制作された年代は江戸時代後期から昭和初期までと幅広く、形式や意匠もさまざまなものです。江戸時代後期の棚は、どちらかというと日常的な空間で使用されたものが多く、そのほか、婚礼調度の伝統に根ざしたのも伝えられています。一方、近代期に入ると、御下命による制作、博覧会や展覧会出品の御買上げ、御慶事などの際に献上を受けることで、宮中に収められました。その中には、当時の工芸技術の粋が結集された、近代期の漆工芸を代表する作品も含まれています。また、この時期のものには、専用の棚飾り品をとまなっている作例も見られます。

本展覧会では、これらの棚と棚飾り品を一堂に紹介いたします。時代の変化にともなう調度の様相の移り変わりを感じながら、ひとつひとつの作品に見られる優れた技量と、多彩な意匠を楽しんでいただければ幸いです。

平成十三年九月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第26回 宮中の調度－棚と棚飾り)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	松竹梅蒔絵棚		一基	江戸時代(18世紀)	p. 9-11
2	近江八景蒔絵棚		一基	江戸時代(18世紀)	p. 12-14
3	四季耕作図蒔絵棚	古満巨柳	一基	江戸時代(18世紀)	p. 15-17
4	菊花紋散蒔絵厨子棚		一基	江戸時代(18~19世紀)	p. 18
5	菊花紋散蒔絵黒棚		一基	江戸時代(18~19世紀)	p. 19
6	扇流蒔絵棚		一基	江戸時代末期~明治初期(19世紀)	p. 20-22
7	菊山水蒔絵棚		一基	江戸時代末期~明治初期(19世紀)	p. 23
8	流水松竹梅蒔絵冠棚		一基	江戸時代(18~19世紀)	p. 24
9	海辺松桜蒔絵冠棚		一基	江戸時代末期~明治(19世紀)	p. 25
10	菊花散蒔絵十種香道具		一件	江戸時代(18世紀)	p. 26
11	忍草蒔絵短冊箱		一点	江戸時代(18世紀)	p. 27
12	菊花折枝蒔絵文箱		一点	江戸時代(18~19世紀)	p. 27
13	鳳凰唐草春草蒔絵棚	新井半十郎・ 川之邊一朝ほか	一基	明治14年(1881)	p. 28-29
14	四季草花蒔絵棚	佐々木高保	一基	明治28年(1895)	p. 31-32
15	秋草流水蒔絵螺鈿棚	川之邊一朝	一基	明治28年(1895)	p. 33
16	菊蒔絵螺鈿棚	川之邊一朝ほか	一基	明治36年(1903)	p. 34-35
17	山水篋流蒔絵棚		一基	明治時代(19世紀)	p. 36
18	桑木地飾棚	伊藤平左衛門	一基	明治40年(1907)	p. 37
19-1	鶴亀置物(桑木磁飾棚付属棚飾り)	高村光雲・ 竹内久一	一对	明治40年(1907)	p. 38
19-2	桜花白磁香炉(桑木磁飾棚付属棚飾り)	清風與平	一点	明治40年(1907)	p. 38
19-3	双蝶七宝香合(桑木磁飾棚付属棚飾り)	濤川惣助	一点	明治40年(1907)	p. 38
19-4	古今集蘆手蒔絵香盆 (桑木磁飾棚付属棚飾り)	川之邊一朝	一点	明治40年(1907)	p. 38
19-5	牡丹折枝印筆筒鏡板 (桑木磁飾棚付属棚飾り)	海野勝珉	一点	明治40年(1907)	p. 39
19-6	獅子鈕銅印(桑木磁飾棚付属棚飾り)	鈴木長吉・ 中井敬所	三顆	明治40年(1907)	p. 39
19-7	龍青華肉池(桑木磁飾棚付属棚飾り)	宮川香山	一点	明治40年(1907)	p. 39
19-8	松波蒔絵硯箱(桑木磁飾棚付属棚飾り)	白山松哉	一点	明治40年(1907)	p. 40
19-9	蛇籠千鳥水滴(桑木磁飾棚付属棚飾り)	香川勝廣	一点	明治40年(1907)	p. 40
19-10	鹿鎮子(桑木磁飾棚付属棚飾り)	石川光明	一点	明治40年(1907)	p. 40
19-11	古今集歌絵畫帖(桑木磁飾棚付属棚飾り)	川島甚兵衛・ 荒木寛敵ほか	一帖	明治40年(1907)	p. 40
20	若松菊山水蒔絵棚		一基	明治時代(19~20世紀)	p. 41

21	網代蕙蒔絵棚	大垣昌訓	一基	大正3年（1914）	p. 42-43
22	楼閣山水木彫堆黒棚		一基	明治～大正（19～20世紀）	p. 44
23	桑木地透彫棚	前田南齊	一基	大正4年（1915）	p. 45
24	舞楽蒔絵棚	西村彦兵衛	一基	昭和3年（1928）	p. 46-48
25	牡丹螺鈿棚	五十嵐三次	一基	昭和8年（1933）	p. 49
26-1	胡俗楽苑七宝飾皿 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	稲葉七穂	一点	昭和3年（1928）	p. 54
26-2	藤菖蒲螺鈿軸盆 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	豊川楊溪	一点	昭和3年（1928）	p. 55
26-3	玳瑁化粧具箱・化粧道具 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	森田佳鳳・ 江崎栄造	一件	昭和3年（1928）	p. 56
26-4	褥（鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	山鹿清華	十二点	昭和3年（1928）	p. 63-65
26-5	春秋刺繍写真立 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	渡邊松華・ 黒田橘邨	一对	昭和3年（1928）	p. 57
26-6	宝相華磁器香炉 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	石野龍山	一点	昭和3年（1928）	p. 58
26-7	双鳥堆朱香合 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	堆朱楊成	一点	昭和3年（1928）	p. 58
26-8	撫子蒔絵香盆 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	鶴田和三郎	一点	昭和3年（1928）	p. 58
26-9	初音蘆手絵裁縫箱・裁縫道具 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	島田佳矣・ 木内半古ほか	一件	昭和3年（1928）	p. 59-60
26-10	玳瑁文房具箱・文房具 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	島田佳矣・江崎栄造・安 藤重壽	一件	昭和3年（1928）	p. 61
26-11	化粧道具 （鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	島田佳矣・ 岩城倉之助ほか	一件	昭和3年（1928）	p. 62
26-12	褥（鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り）	山鹿清華	十点	昭和3年（1928）	p. 66-67

## 館蔵の棚にみるその在り方の変遷 — 近世から近代へ

当館には、数多くの棚が収蔵されている。棚といっても、書院造の建物の一部に組み込まれ、掛軸や生花、各種の工芸品が飾られる違棚ではなく、ここで述べようとするのは、室内各所に置かれる、移動可能な置棚のことである。

当館所蔵の作品は、その制作年代は江戸時代後期から昭和初期まで幅広く、その形式や意匠もさまざまである。また、全体に蒔絵が施された漆工の棚や、指物や彫刻の優れた木工の技が見られるものなど、その技法や材質も多岐にわたる。いずれの棚も、宮中のどのような機会に、どのような空間で用いられ、棚飾り品として何が載せられていたかは、現在のところ記録の上に見いだすことができず、これらの棚が実際に使用されていた様相をそのままに再現することはできない。だが、当館に伝えられている江戸時代の棚は、公的な場で使用されるというよりは、その形式から、宮中でも奥向きの日常的な場に置かれたものと考えられ、香の遊びの席を華やかなものに演出したり、身の周りに書棚として置かれていたことがうかがえる。また、近世期に完成した婚礼調度の伝統に位置づけられる棚も収蔵されている。

一方、近代期に制作された棚の数々はどうか。明治維新以降、西洋化が推進されて、生活様式の全てが大きく変化を受けながらも、当館に収蔵されている棚は、基本的には伝統的な形式、意匠を受け継ぐものであり、また、平安時代の古式の棚に倣った復古調の作例も見受けられる。棚の保存状態や、棚を載せるためにあつらえられた台が付属している例もあることから、棚が、宮中において実際に配置され、使用されていたことが看取される。

このように、近世から近代にかけてのさまざまな種類の棚がまとまって伝えられている例は、他所にはあまり知られないことと思われる。また、近代期の棚の中には、専用の棚飾り品が一式制作されて、棚とともに伝えられている作例があることも、もうひとつの大きな特色といえる。本展覧会では、これらの棚と棚飾り品を「江戸の蒔絵棚と棚飾りの諸道具」、「伝統の継承と近代の意匠」という大きくふたつのテーマのもとで、三期に分けて紹介

することとした。明治維新という、大きな転換期を挟みながらも、江戸時代からの伝統的な形式を具えた棚が使用され続け、また、近代期の作例に施された新しい意匠や、棚にともしない伝えられる棚飾り品の在り方に、宮中調度、あるいは室内装飾、いかえればインテリアの一面をとらえようとするのが、本展を企画した意図のひとつである。

ところで、棚は、調度あるいは家具と呼び慣わされる。今日、このふたつの言葉はそれぞれ「手回りの道具、家具」、「生活に必要な家の中の道具、調度」というように、ほぼ同義に扱われているが、ここでは、蒔絵などが施され、装飾性が前面に押し出された、実用的というよりは飾りものとしての要素が強くあらわされている道具類を調度としてとらえることにする。

今回、紹介する棚は、そのほとんどが当館では初めて公開する作品である。棚飾り品として出品している作品も、これまでの展覧会で紹介されてはきているが、本展では棚と組み合わせることを試みた。これらの諸作品について今後、検討すべき課題も多く残されているが、以下に、出品作全体を通観して気づかれる特質を幾つか記しておくこととしたい。

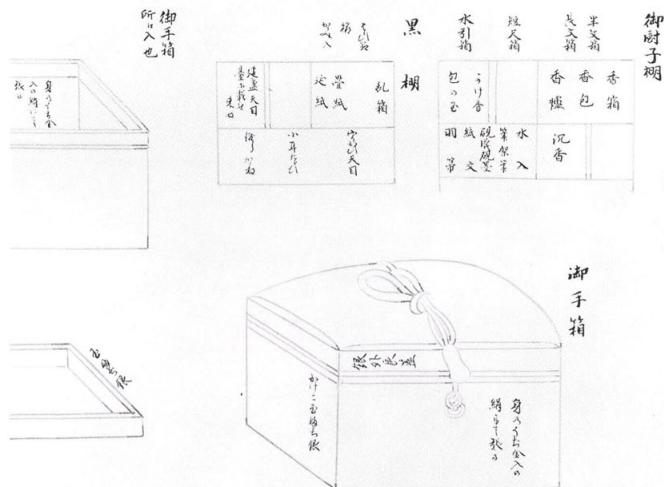
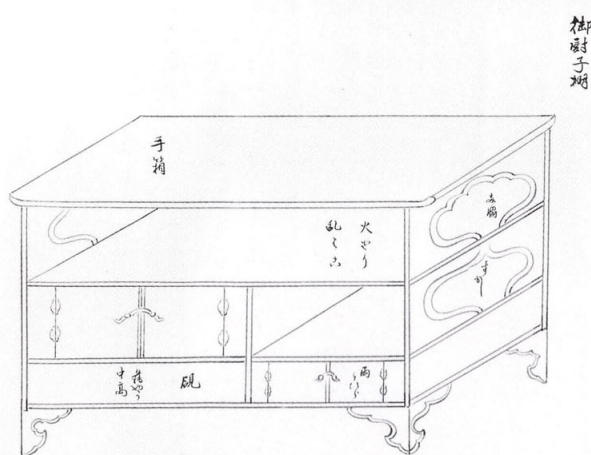
館蔵の棚の多くには、厨子と呼ばれる、収納部分がそなえられている。厨子は、両開きの扉をつけ、扉中央には懸金具を据えた形式のものをいう。正倉院や法隆寺には、こうした厨子棚の原形といわれる奈良時代（八世紀）の収納家具が現在に伝えられている。正倉院には、『赤漆文櫨木厨子』《黒柿厨子》《黒柿厨子》の三基の棚が現存する。材質や装飾は異なるが、いずれも両開きの扉のついた、箱形の、四面が塞がれたもので、扉中央に鑢子（錠前）がつく形態をそなえており、収納を目的とした実用的なものであったと考えられている。特に『赤漆文櫨木厨子』は、『国家珍宝帳』の二番目に記された献納宝物であり、その内容品とともに、聖武天皇の最も身近にあった大切な品ととらえられる。特にその伝来には、天武天皇から、天武、持統天皇直系の天皇のみに相伝されたことが記され、皇位継承の際に、象徴的に使われた品であったことがこれまでに指摘されている。このように、奈良時代においては特別な意味をも含む、貴重な品であった厨子は、平安時代になる

と、貴族の邸宅の室内調度品のひとつとして、「二階厨子」と呼ばれる棚のことに整えられることとなる。

平安時代の棚の作例は残されていないが、当時の宮中の室内装飾や調度類の姿をうかがうことができる史料に、『類聚雑要抄』がある。『類聚雑要抄』は、平安時代の末期に編纂されたもので、四巻からなり、宮中や摂関家である藤原家の邸宅で執り行われた諸儀式や行事についてまとめられている。その中には、行事の際、どのように室内を整備し、調度類が配置されたかが図とともに記されており、調度の詳細についても記載されている。この『類聚雑要抄』に載せられた平面図を立面図化し、彩色した図巻『類聚雑要抄指図巻』が江戸時代中頃に制作されている。ここに記載されている棚には、厨子の上にもうひとつ棚板が設けられた「二階厨子」のほか、棚板だけが渡された「一階棚」あるいは「三階棚」がある。「二階厨子」は、母屋の室内中心部に二つ並べて配されており、間口二尺八寸五分、奥行一尺三寸七分、高さは二尺で、漆が塗られたうえに、蒔絵が施され、金具が装着されている。天板と中の棚には唐錦の敷物を敷き、四隅から飾籠を下げる。これら一対の棚のうち、片方には櫛箱、香壺箱、枕箱などが、もう一方には造紙箱、葉箱などが納められ、棚の上に置かれたことが記されている。

このほか、『源氏物語絵巻』の宿木の巻に描かれた二階厨子は、黒漆塗の上に蒔絵が施された棚で、上段には箒が載せられ、下段には卷子などが置かれている。このように、奈良時代の厨子が、平安時代には棚をともなった「二階厨子」として形式が整えられ、貴族の間ではかなり広く使われていた様子がみとれる。また、それは実用的というより、装飾性の強いものであり、室内装飾のなかでも重要な調度として室内に配置されていたことが示されている。この平安時代の厨子棚に見られる棚の特質が、そのまま、後世に伝えられ、基本的には大型の家具を生活空間に置くことのない日本の伝統の中で、棚を座敷に飾り、書院造の室内には、造りつけの棚が建築要素として取り込まれていく過程へ繋がるものであることは、これまでも指摘されている。このように、厨子のそなえられた棚は歴史的に見ても、長い伝統の中に伝えられた形式を引き継ぐものといえるだろう。

蒔絵で飾られた調度類のなかでも、棚を中心にさまざまなものが調えられた婚礼調度には、江戸時代の漆工芸を代表する優品が含まれ、現在も各所にその作例が伝えられており、当館にもその形式を引き継ぐ棚（作品番号4・5）、および櫛飾り品（作品番号12）が收藏されている。婚礼調度の形態は、室町時代にすでにその基本は整っていたといわれており、貝桶、厨子



挿図 《婚礼調度図巻》明治33年(1900) 三の丸尚蔵館所蔵



棚、黒棚、唐櫃、長櫃、長持、御屏風箱、行器（はかばか）が、嫁入り道具として挙げられている。

作品が現存し、その確かな伝来記録も残されている最古の作例とされるのは、『初音の調度』（徳川美術館所蔵）である。寛永十六年（一六三九）徳川三代将軍家光の長女千代姫が尾張徳川家二代光友に嫁いだ際に調えられた調度類で、幕府の御用蒔絵師幸阿弥家十代長重が一門を率いて、三年の年月をかけて制作したものである。厨子棚、黒棚、書棚の三棚を中心に、貝桶、十二手箱、乱箱など、数々の調度類は、『源氏物語』の初音の帖から題材がとられた意匠で統一され、豪華絢爛な蒔絵が施されている。このように、寛永期には婚礼調度の形式、種類がととのえられていたことが知られる。その後、婚礼調度は、格式によってその内容に違いがあるにせよ、将軍家、大名家、公家の婚礼に際しては、次第に形式化されながらも、必ずあつらえられた調度であった。

こうした婚礼調度は、徳川幕府の末期まで制作されたとされるが、明治期になってからも、その伝統がすぐに途絶えた訳ではなく、婚禮に際しては、当然何らかの調度が調えられており、その際には、近世期の婚礼調度のかたちも引き継がれていたと考えられる。

明治三十三年の皇太子（大正天皇）御成婚の折りに献上された《婚礼調度図巻》（挿図・三の丸尚蔵館所蔵）には、厨子棚と黒棚を中心に婚礼調度の略図が描かれており、香道具、文箱、耳壺、角赤箱などの配置の位置や、手箱の仕立てが記されている。すでに当時は、こうした調度が全てあつらえられることはなかったと思われるが、棚飾りの様子を今日に伝える記録のひとつである。

ここまで、主に棚の形状の変遷について述べてきたが、意匠と技法についても簡略に触れておきたい。今回、紹介している江戸時代の蒔絵棚の意匠には、松竹梅や流水、菊花など吉祥を表す典型ともいべき文様が多く用いられており、このほか、近江八景、『源氏物語』など、名所絵や文学作品を題材とした作例もある。いずれも、絵画作品とも関わる、伝統的な図様である。棚全体にこうした意匠が配される中、柱や地板の部分には七宝繋や花菱繋、蜀江文様などの連続的な文様を配し、棚板や側面の画面とは区切って、装飾的な側面を示していることもこの頃の棚の特徴かと考えられる。技法的には、高蒔絵、平蒔絵、研出蒔絵など、蒔絵の基本技法を中心に堅実に仕上げられており、金貝、切金が併用されている。棚板の裏側や、厨子、袋

棚の内部は梨子地や叢梨子地で仕上げられ、奇異をてらった表現はなく、落ち着いた気品あふれる作品にまとめられている。これらの棚は、御在来の品のほか、伝来は明確にされていないものが多く、その他、数は少ないが、明治期に買上げられた作品も含まれている。

一方、近代期に制作された作品が宮中に収められた経緯は、大きくみて、次の三点に分けられる。御下命による制作、内国勸業博覧会や展覧会出品物の買上げ、御慶事などの際に受けた奉祝献上である。このほか、当時、宮内省調度局が購入もしくは制作依頼していた棚も相当数存在していたと考えられる。館藏品には、必ずしも詳細な伝来記録をとまわらないものも少なくないが、こうした宮内省調度局経由で宮中に収められたものも存在する可能性があるのかもしれない。

作品の中にはその優れた技術により、近代の漆工芸を代表するものが含まれている。特に明治天皇の御下命により制作されたと伝えられる《菊蒔絵螺鈿棚》は、十一年の歳月をかけて制作された棚で、宮内省が直接、その意匠の決定にも深く関わり、宮内省内に細工所を設けて、材料の蒔絵粉の製造から、そこで作業が行われたと伝えられる作品である。明治天皇の御下命の経緯や、宮内省内にその細工所が設けられたことを直接示す記録は、宮内庁のなかに、現在のところ見出すことはできないが、特に漆工芸の振興と、当時の最高技術が集結された作品を後世に残すことが、そのプロジェクトの目的にあつたと考えられる。

このほか、皇室と漆工界との関係は深く、博覧会、展覧会の出品物の御買上げは明治期、盛んに行われていたことが知られる。特に、明治二十四年、日本漆工会が創設されたが、その主催の下に翌年の明治二十五年から隔年で開催された漆工競技会において、宮内省は実に多くの漆工作品を買上げている。第二次、四次、六次競技会には明治天皇も行幸され、川之邊一朝ら数多くの工芸家が蒔絵などの実演をその御前で行ったことが『日本漆工会雑誌』等の記録でも確認されるところである。工芸家にとって、自らの作品が買上げられ、御前でその技を披露することは、何よりの名誉であり、制作への励みにもなったと考えられる。

また、明治期の棚について特に触れておきたいのが、博覧会、展覧会出品物の名称が一樣に、「書棚」と付けられていることである。厨子棚などの伝統的な形式を引き継ぐものでありながら、飾棚として使用されたと考えられる棚も、すべて「書棚」と記されている。生活様式の欧化の進む中で、新し

い意匠を求めていた当時の動きの中にあつて、棚の使用法も変化していき、古式を伝える名称は、あえて避けられたのであろうか。書棚は、文字通り、本来は書物を載せる棚のことを指しているが、その他の用途に使用することを目的に造られた、さまざまな形態のものをも、総称する言葉として定着していたと推察されるのである。

館蔵の近代期の棚の中でも、棚に専用の棚飾り品が揃えられた二件の作例(作品番号19・26)は、棚と、棚飾り品ともに、当時の著名な作家によつて、それぞれ分担制作されたもので、一方は、明治四十年当時、在任中の帝室技芸員全員の合作であり、もうひとつは東京美術学校(現東京芸術大学)に委託され、総数一三七人もの工芸家によつて制作された作品である。棚飾り品は、さまざまな意匠、技法や材質も異なるものであり、これらがそつとて漆工や木工の棚に飾り付けられて室内を飾る姿は、他所にはほとんど例のないものであろう。明治三十年の『日本美術協会報告』第一一六号には、大森惟中による「時絵金沢公園図書館考案説明書」の記事が掲載されているが、金沢在住の、各分野の工芸家の名前が挙げられて、棚と棚飾り品制作がそれぞれに分担された内容が記載されており、明治三十年当時には、すでにこうした新しい室内装飾の試みがなされていたことをうかがわせる。

明治維新以降、宮中の生活様式は急速に欧化されていくが、こうした新しい時代の室内装飾の在り方は明治宮殿と赤坂離宮に象徴的に示されている。明治宮殿は東京遷都後、皇居として使われていた江戸城西の丸が、明治六年に焼失、その後建てられた宮殿で、明治二十一年に竣工した(昭和二十二年に戦災で焼失)。その外観は京都御所と同じ純和風の木造建築の宮殿だが、公的な部分は椅子座、私的な部分は床座という和洋折衷を取り入れ、室内装飾も、和洋折衷であつた。当時、ヨーロッパの宮殿建築ではバロック様式が全盛であり、明治宮殿はその影響を受けていると言われる。伝統的な書院造とバロック風建築を組み合わせた折衷様式の室内には、漆が塗られ、時絵が施されて、飾金具や西陣織で飾られるなど、重厚な宮廷空間を創出するものであつた。一方赤坂離宮は当時、東宮御所として建設され、明治四十二年に完成、こちらはネオバロック様式の完全な西洋建築の様式で統一されていた。室内装飾も同様に調えられ、家具のほとんどもフランスから輸入されたものであつた。

これまでに指摘される通り、生活様式の欧化の中で、もつとも本質的な問題は、床座から椅子座への変化にあつたとされる(小泉和子『家具と室内意匠の文化史』法政大学出版局)。日本では、古代の一時期に、支配者階級の

間で椅子座が使用されていた以外は、長い間、床座の習慣が続けられていた。椅子座、床座の違いは、建築に始まり、室内調度ばかりではなく礼儀作法や、動作など、生活のすべてに通じる問題である。椅子座へ移行するなかで、その軋轢をどう解決していったのかという動向そのものに、近代期の室内装飾の在り方も関係しているように思われる。館蔵の棚のほとんどが、伝統的な棚形式を持つものであることは、はじめに述べたが、それらは当然、床座の生活の中で使用されてきた形式の棚である。しかし、その中には、伝統的な形式を具えながらも、棚に専用の飾台が付属している作例が幾つか見られる(作品番号3・15・21作品解説ページ参照)。これらは四脚のついた卓(香炉や香合を飾り置く台としても古来より使用される)と同じ形態を具えている。明治期の陶磁器や金工品には、置物台が添えられた例は多いが(たとえば秦蔵六《銅鼎形花瓶》当館展覧会図録『明治美術再見Ⅰ・明治美術会と日本金工協会の時代』所載)、これらの棚に付属する台はいずれも、四十〜五十cmほどの高さであり、床からかなり高さを持たせるための台と考えられ、置物台とは、その使用目的も異なるように思われる。やはり、これは椅子座の生活の中で、伝統的な形式の棚を室内に飾るために考え出された方法のひとつであらう。宮殿の公的な場が西洋式の家具類で統一される一方で、宮中では、伝統的な棚がなお使用され続けていたことが、当館に所蔵される棚のコレクションからもうかがわれるのである。

これまでみてきたように、当館の棚の数々は、形式や意匠、そのあり方に、さまざまな要素が認められる。特に近代においては、作品の収められた背景に、御下命の制作、買上げや献上など別々の経緯があるにせよ、作品に見いだされる形式、意匠には伝統性が重要視され、堅実にまとめあげられているのである。技巧が凝らされたこれらの作品には、高い装飾性が認められる。棚とそれを中心にあつらえられたこれらの作品は室内装飾としても位置づけられることを、本展を通じてご理解いただければと思う。

五味 聖(ごみ ひかる)／当館学芸室研究員

江戸の蒔絵棚と棚飾りの諸道具

1 松竹梅蒔絵棚 江戸時代(十八世紀)





背面



厨子扉





2  
近江八景蒔絵棚  
江戸時代(十八世紀)



引戸部分



厨子屏



中段柵板



3 四季耕作図蒔絵棚 古満巨柳 江戸時代(十八世紀)



背面



天板



背面下段部分



中段右棚板部分



下段左棚板部分

4 菊花紋散蒔繪厨子棚 江戸時代(十八、十九世紀)



5 菊花紋散蒔絵黒棚 江戸時代(十八〜十九世紀)





6 扇流時絵柵 江戸時代末期、明治初期(十九世紀)



背面





7 菊山水蒔絵棚 江戸時代、明治初期(十九世紀)





天板部分

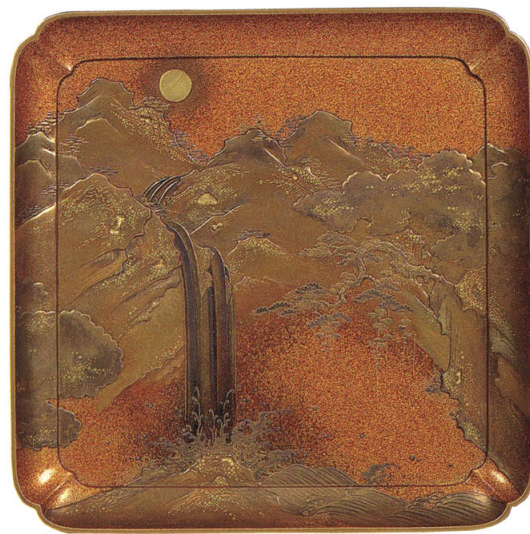


9 海辺松桜蒔絵冠棚 江戸時代末期～明治(十九世紀)





外箱



香盆

11 忍草蒔絵短冊箱 江戸時代(十八世紀)



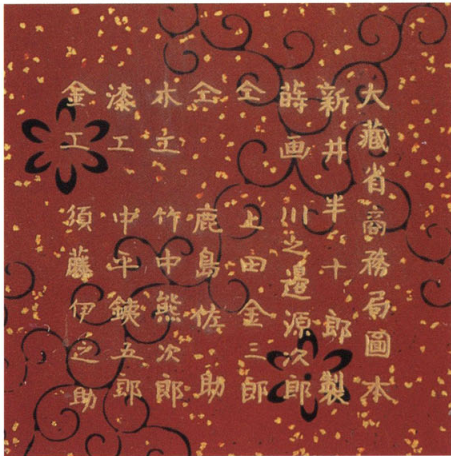
12 菊花折枝蒔絵文箱 江戸時代(十八、十九世紀)



伝統の継承と近代の意匠

13 鳳凰唐草春草蒔絵棚 新井半十郎・川之邊一朝ほか 明治十四年（一八八二）





背面左下隅／銘

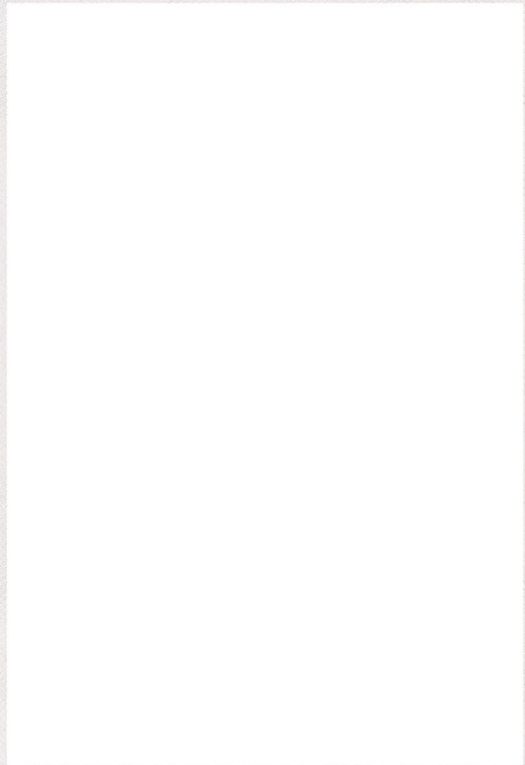


背面





天板部分



参考図版

『温知図録』(東京国立博物館所蔵)より



14 四季草花蒔絵棚 佐々木高保 明治二十八年(一八九五)



背面



厨子扉



厨子扉内側

15 秋草流水時絵螺鈿棚 川之邊一朝 明治二十八年(一八九五)

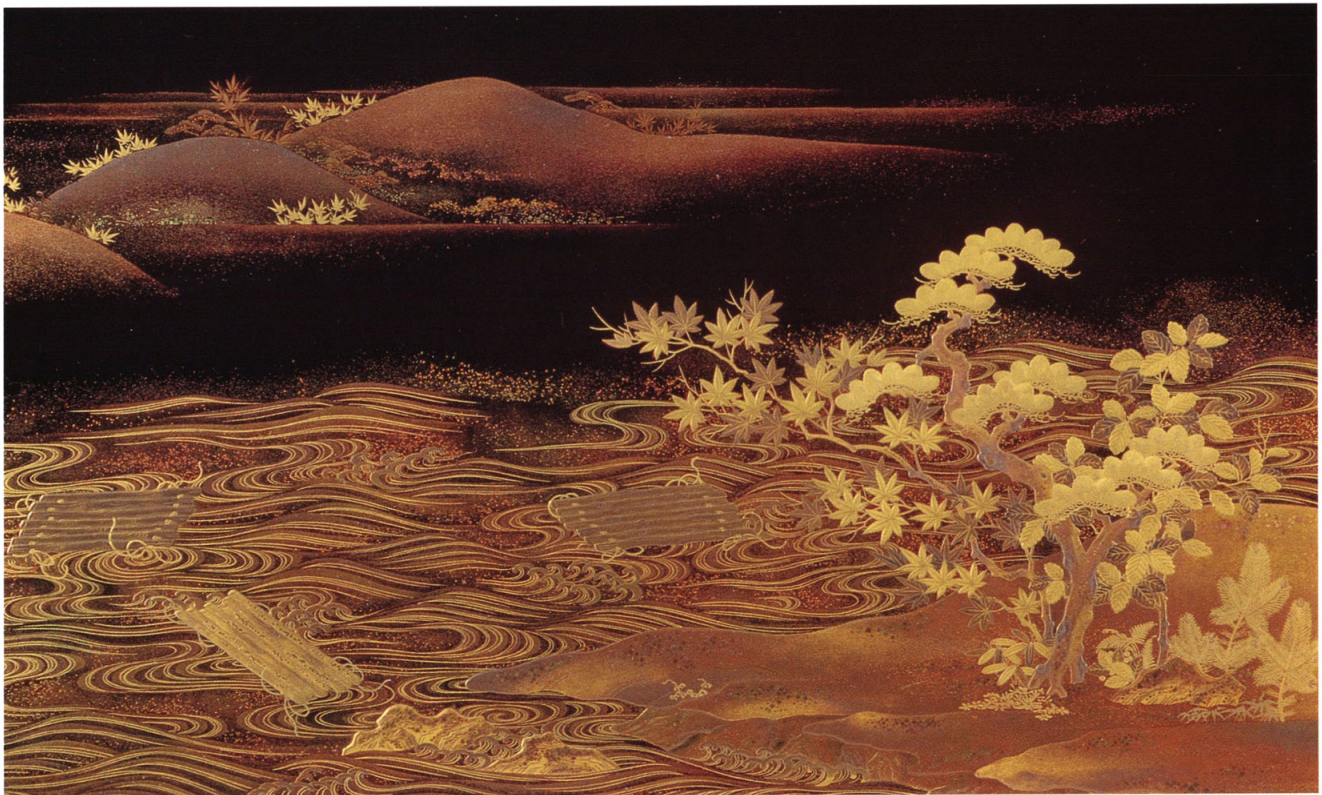




16 菊蒔絵螺鈿棚 川之邊一朝ほか 明治三十六年(一九〇三)



17 山水筏流蒔絵棚 明治(十九世紀)



背面下部分



棚飾り品をのせた姿

18 桑木地飾棚 伊藤平左衛門 明治四十年(一九〇七)



19 桑木地飾棚付属棚飾り 明治四十年(一九〇七)

19-1 鶴亀置物 高村光雲・竹内久一



19-3 双蝶七宝香合 瀧川惣助



19-2 桜花白磁香炉 清風與平



19-4 古今集蘆手蒔絵香盆 川之邊一朝





19 | 5  
牡丹折枝印笄筒鏡板  
海野勝珉



19 | 7  
龍青華肉池  
宮川香山



19 | 6  
獅子鈕銅印  
鈴木長吉・中井敬所





1919  
|  
9 8  
松波蒔絵硯箱  
蛇籠千鳥水滴  
白山松哉  
香川勝廣



19  
|  
10  
鹿鎮子  
石川光明



19  
|  
11  
古今集歌絵畫帖  
川島甚兵衛・荒木寛畝ほか





21 網代葛蒔絵棚 大垣昌訓 大正三年(一九一四)



天板



引戸部分／銘



22 楼閣山水木彫堆黒棚 明治〜大正(十九〜二十世紀)



厨子扉

23 桑木地透彫棚  
前田南齊 大正四年(一九一五)



24 舞楽時絵棚 西村彦兵衛 昭和三年(一九二八)



引戸細部







天袋引戸部分



引戸部分

25 牡丹螺鈿棚 五十嵐三次 昭和八年(一九三三)



側面螺鈿部分



鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚 島田佳矣ほか  
昭和3年(1928)



鶴桐蒔絵螺鈿飾棚 島田佳矣ほか  
昭和3年(1928)



鳳凰菊時絵螺鈿飾棚および棚飾り品一式  
【御成婚奉祝献品図録】昭和4年より



鶴桐時絵螺鈿飾棚および棚飾り品一式  
『御成婚奉祝献品図録』昭和4年より

26 鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚・鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属棚飾り 昭和三年（一九二八）

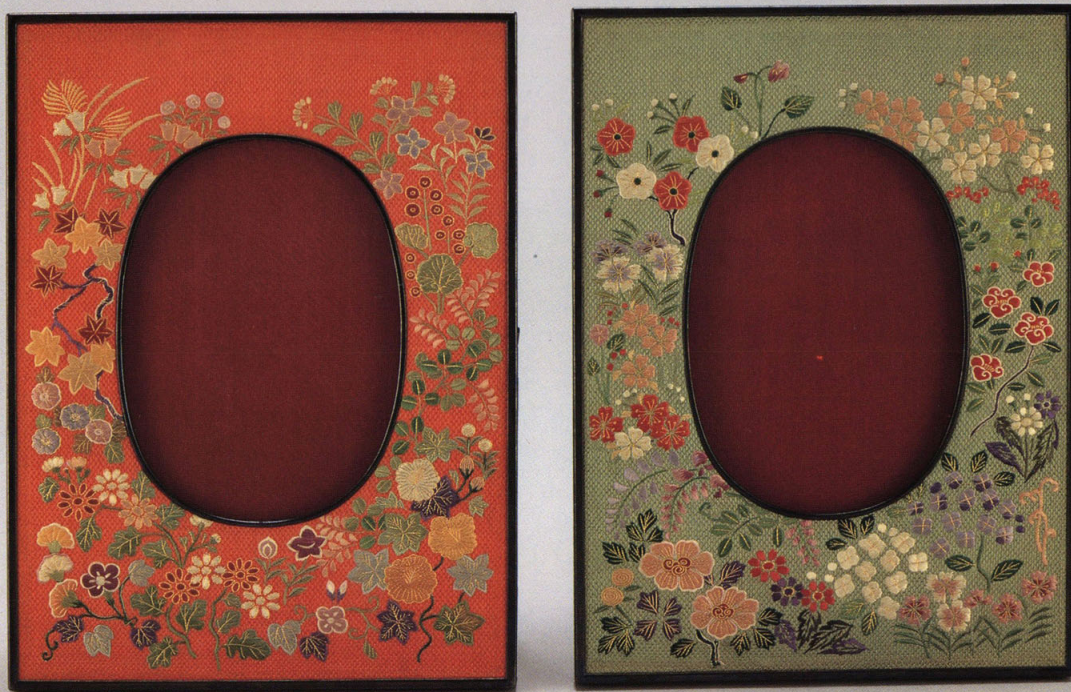
26 | 1 胡俗菜苑七宝飾皿（鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属） 稻葉七穂

高台内／銘









26 | 6 宝相華磁器香炉(鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属) 石野龍山  
 26 | 7 双鳥堆朱香合(鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属) 堆朱楊成  
 26 | 8 撫子蒔絵香盆(鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属) 鶴田和二郎



香盆



香盆底裏部分/銘



側面



裁縫道具



懸子内部



26  
—  
11

化粧道具（鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付匣）  
島田佳矣・岩城倉之助ほか

<参考図版>外箱

内容品

玻璃容器







26 | 4

褥（鳳菊蒔絵螺鈿飾棚付屬）

山鹿清華



26 | 12

褥（鶴桐時絵螺鈿飾棚付属）

山鹿清華

# 作品解説

## 1 松竹梅蒔絵柵

江戸時代(十八世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦四四・七 横九八・五 高七五・五

一基

蒔絵の金色の輝きと黒漆地の対比も鮮やかな柵で、流水と梅を中心に、土坡には若松と若竹を配した、松竹梅の意匠で全体がまとめられている。天板の右下に小さな厨子を付け、中段右には厨子、左には引出しを、下段の地袋には四枚の引戸を付ける柵形式である。梅や土坡は高蒔絵の技法で表され、幹の部分には丹念に切金(正方形、長方形などに裁断した薄い板金)が置かれる。梅の枝にかかるようにたなびく霞には、金粉の蒔き暈かしに加えて、切金の技法が多用されている。その切金の置き方には特徴があり、大小や四角、短冊形を取り混ぜて、バランスよく配置する。また、合金比の違いによる、色彩の異なった切金で微妙に金の色にも変化を付けている。柱や両開きの厨子扉の縁周りは七宝繋文の蒔絵で、厨子や引戸の内部は、凹文を基本とした叢梨子地で装飾されている。

厨子の懸金具は菊と松の折枝が高肉に彫り出されており、菊花の一部には鍍金が施されている。柵板側面や中段筆返しに付けられた金具は、魚々子地に菊、若松に唐草の文様で、引手金具は丸形に菊枝を付けたものである。脚台の金具は特に厚みがあり、剣形の曲面に沿って取り付けられている。

本作品は「蝨色松竹梅蒔絵書柵」の名称で伝えられており、書柵としてのほか、香の席で香道具を飾り置くなど、多くの用途に使われたと考えられる。

## 2 近江八景蒔絵柵

江戸時代(十八世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦四三・六 横九〇・七 高八五・五

一基

近江八景の各所を象徴する瀬田の大橋や石山寺と月などとともに、松竹梅や橘、桜の木々という吉祥や春のモチーフが各所に配され、全体が優雅に彩りまとめられた柵である。

文様は、梨子地に金と銀の高蒔絵、付描、切金などの技法で描き出され、金のごく薄い板を広い面積に貼り付ける金貝の技法が効果的に使われている。

柵上部には、四枚の引戸が付けられた天袋が具えられ、その下は三段に分かれ、右には厨子、左は二段の柵板を、下段に引出しを付ける。引出しは、前面のみならず、外側の全ての側面にまで、連続して蒔絵が丁寧に施されており、引出しを外して使用することも考慮されていたことが窺われる。

近江八景の配置は、天板には三井晚鐘と堅田落雁、天袋の引戸には石山秋月、中段右柵板には比良暮雪、左柵板は粟津晴嵐、厨子扉は瀬田夕照、下段の柵板と背面に矢橋帰帆あるいは唐崎夜雨のいずれかの場面が配されていると考えられる。

柱や脚台には梨子地に蜀江錦の文様を蒔絵で描き、装着された金具も同じ意匠で統一されている。金具は銀製で厚みがあり、彫りも深い。厨子の懸金具は桜の折枝、引手金具には八重桜文が置かれている。

## 3 四季耕作図蒔絵柵

江戸時代(十八世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦四〇・二 横九五・七 高八一・五

一基

四季を通しての農作業の情景を、さまざまな蒔絵技法で繊細に描いた柵である。天板には、湖に浮かぶ舟や橋、寺院の塔などが表されており、近江八景の名所絵がモチーフとして用いられていると考えられる。名所絵とともに、田園の様子が柵全体に描かれ、琵琶湖周辺の農村を舞台とした四季耕作図を表している。各段の柵板、側面、背面には、上段から下段の方へ初撒きから、田植えや草取り、稲刈り、脱穀、そして倉へ米俵を運ぶ人々の様子が、表情豊かに、生き生きと描き出されている。

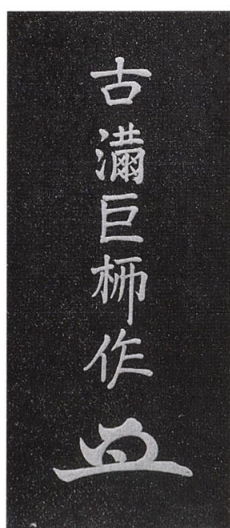
天板の下は右上と左中段に二枚引戸の袋柵を、下段に二段の引出しを付ける。引戸は、木地に透漆を塗り、その上に高蒔絵で土坡と牡丹などを描く。引戸の上部はそれぞれ七宝繋文と網目文の透かし彫りにされた窓が設けられ、内側から紗の裂が貼られている。

背面右下隅に「古満巨柳作(花押)」の蒔絵銘が記されている。巨柳は安永、天明年間頃に活躍した蒔絵師で、印籠の作品にはその銘がよく見られる。古満家は寛永年間から代々、幕府の御用蒔絵師をつとめており、巨柳は五代休伯安巨(安永六年没)の門人であった。本名は木村七右衛門であるが、蒔絵の技術に秀でていたために、古満姓を許され、巨柳と号した。

巨柳の作品として、本作の様な大型の作例は、これまで知られておらず、また他の作品に入れられた銘や花押と相違が見られ、今後、技法や意匠を中心に、他とのより詳細な比較、検討が必要と考えられる。

本作品の伝来の詳細は不明であるが、明治期にあつらえられたと考えられる専用の台が付属している。

四季耕作図は、室町時代から江戸時代にかけて、障壁画や屏風、掛幅によく取り上げられた画題である。国の繁栄の根本は農業にあり、君主の徳は農民の労苦を知ることにあるという、中国の儒教を起源とする思想を画像化したもので、治世者らは、こうした作品を通じて、子女の教育を行ったといわれる。



背面右下部／銘

心に櫛箱、函黒箱などが飾られた。

この厨子棚、黒棚は、同一意匠でまとめられており、梨子地の上に、菊花を散らしている。菊花は八重菊で、すべて同形文様だが、金と銀の高蒔絵、平蒔絵、切金、金具の技法で変化を付けて描かれる。金具は銀製で、菊花と唐草の文様、懸金具には菊枝を付ける。

本作品は、御在来の品として皇室に伝わったものである。現在に伝えられている江戸期の婚礼調度の棚の場合、文様とともに、それぞれの家紋が全体に散らされる例が多い。本作品の菊花散は、吉祥文様として古来、様々な工芸品の上に用いられてきたものと共通しているが、その伝統を受け継ぎながらも、家紋を散らすかのように配置されている。ちなみに菊花が皇室の御紋章として定められたのは明治維新後のことである。

れ、縁は花菱文を巡らしている。文様を際立たせるため

か、引手金具が無いこともこの作品の特徴である。各所に装着された金具は銀製で、唐草に梅花が散らされる。厨子の懸金具は、梅折枝を彫りだしたものである。

ところで、本作品の厨子と引戸の扉は、枠に板を嵌め込んだような構造であり、また、蝶番の金具が他の部分と異なる菊の文様であること、形状の異なる鋳で金具が打ち直されていることから、当初とは姿を変えている可能性が考えられる。伝来には明治三十二年九月に宮内省が川之邊一朝らに依頼して、内匠寮所管の漆工品の調査を行った際、本作品については、「開キ扉ハ三十年程前鞍師上田喜三郎ナル者製作シタルモノ」という報告があったことが記録されている点からも、何らかの理由で棚前面の意匠に変更が加えられたことが推察される。

#### 4 菊花紋散蒔絵厨子棚

江戸時代(十八〜十九世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦三九・〇 横九七・七 高七二・二

一基

#### 5 菊花紋散蒔絵黒棚

江戸時代(十八〜十九世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦三七・三 横七七・五 高七〇・〇

一基

この二基の棚は、大名家、公家、あるいは商家の婚礼に際してあつらえられた婚礼調度の形式を伝えるもので、それぞれ厨子棚、黒棚と呼ばれる一式の作品である。

この棚には現在、棚飾り品はともなわれないが、制作当初は、棚と同じ意匠の蒔絵で彩られた化粧道具、文房具、香道具などの諸道具が、この棚に載せられたと考えられる。他の例を見ても、こうした婚礼調度の飾り方に一定の決まりはなく、厨子棚には化粧道具、文房具、香道具などの各道具を飾り置き、黒棚には化粧道具を中

#### 6 扇流蒔絵棚

江戸時代末期〜明治初期(十九世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦四二・五 横八八・〇 高七八・〇

一基

四段の棚で、上段左に二枚の引戸、二段目に厨子、そして四段目の地袋には四枚の引戸を付ける。天板両端には筆返があり、二段目左と三段目の右脇板は、それぞれ牡丹唐草と七宝繋の文様が透かし彫りされている。棚全体に施される流水の文様と三段目の宝珠を付けた欄干から、扇を流した川とそこに架かる橋を見立てた意匠であることがわかる。

流水は梨子地を基調とし、要には銀鋳を打ち込み、扇の部分が高蒔絵で、扇の形を立体的に盛り上げている。散らされた扇のうち、開いた状態のものは五十四扇あり、そこに描かれた文様は植物や器物などで、『源氏物語』の各帖を象徴的に表していると考えられる。厨子の部分の扉、引戸には研出蒔絵の技法で木目があらわさ

#### 7 菊山水蒔絵棚

江戸時代〜明治初期(十九世紀)

木製漆塗、蒔絵、彫金、螺鈿

縦三四・五 横六八・五 高六八・〇

一基

秋の村里に流れる川の流れと、八重菊の咲き乱れる様子をあらわした棚。天袋の引戸、棚板には、茅葺きの家々や、その木戸で鶏が餌をついばみ、川の上を雁が渡っていく風景が描かれている。

柱や、棚板の側面には七宝繋文が蒔絵で施され、霞や山、土坡には切金をふんだんに、かつ均一に置いており、全体に金色が強調されている。また、この棚には、高蒔絵の他に、彫金の技術が用いられているのが特徴のひとつである。文様のひとときわ高く盛り上がっている部分には、菊花や鳥を彫金して貼り付けた、金工の技によるものがある。彫金の貼付や象嵌は、蒔絵と併用される技法だが、彫金の部分がこれほど全体にわたって各所に装着された作品は、ほかにあまり例を見ない。金具は銀製で、

柵板側面には唐草、引手金具には菊花が彫られている。

下段柵板の結界には、唐木を菱形繋の格子に透かした板を張り巡らし、板と板の間に螺鈿を施している。中段右に設けられた扉は、上下に溝を付けて戸をはめ外しする襖倉扉で、冊子本を納めたものであろうか。全体に小ぶりの柵で、身近に飾って使用されたものと考えられる。

本作品は明治期に入ってから宮内省が買い上げたもので、保存箱には「納入者弘中松三郎 明治十七年七月五日買上」と記された紙貼りが残され、制作期の下限が知れる。弘中松三郎については詳細は不明であるが、当館には、同じ納入者の記載が見られる漆工作品が他にもあり、当時、宮内省と関わりがあった美術商ではないかと推測される。

## 8 流水松竹梅蒔絵冠柵

江戸時代(十八〜十九世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦三五・二 横六五・六 高四五・八

一基

冠柵は、「かむりだな」とも読む。その多くが蒔絵で彩られ、四脚で二段の柵板を具えたもので、本作品もその形式に従っている。柵板それぞれの側面四カ所に紐金具を付け、飾り絵が下げられる。文字通り、束帯や衣冠の姿の時に付ける冠を置くための柵だが、後には香炉などを置く飾台としても使用されたとされる。

本作品は、全体が梅の意匠で装飾され、装着された金具は銀製、魚々子地に梅花と唐草が彫られる。また香狹間と呼ばれる、柵板と柵板の間の側板部分は、梅花の形に切り透かされている。天板には、画面左上の山中から右方向へ勢いよく流れ下る流水と、中央にひときわ大きく梅と松の木を配し、土坡には若松と若竹を描いている。これらの風景図様は下の柵板にも画面が連続しており、右から流水が左方向へ流れるように同じ文様が配され

ている。香狹間の内外側にも同じ文様が蒔絵で施されている。梅や松、土坡は高蒔絵で、波は研出蒔絵と付描の技法で描かれる。梅花に蒔かれた金属粉には一色あり、紅梅白梅をあらわしている。

## 9 海辺松桜蒔絵冠柵

江戸時代末期〜明治(十九世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦三五・二 横六四・五 高四三・九

一基

本作品は作品番号8の形式と同じ、冠柵である。前出の作品と比べ、図様が単一的で、香狹間や脚部には覆輪を被せず、飾鉾を付さないなど、全体の意匠を簡素化した感が否めず、制作年代の下降がうかがえる。上、下段の柵板には波立つ海と、浜に生える松と桜の木々が描かれる。波は研出蒔絵、土坡は薄く肉上げした高蒔絵、桜花は、金と銀の板を花卉に切り抜いて漆地に貼り付けた金具の技法であらわされている。

## 10 菊花散蒔絵十種香道具

江戸時代(十八世紀)

木製漆塗、蒔絵

(外箱)縦三二・二 横二四・六 高一九・三

一件

十種香道具とは、香合せの遊びのための諸道具を、ひとつの箱にコンパクトに納めたもので、江戸時代には十柱香箱とも呼ばれ、婚礼調度の中にも、その一具として調えられた。寛政五年(一七九三)の奥書のある『婚禮道具諸器形寸法書(国立国会図書館蔵)』には、道具の種類や寸法、それらの配置場所まで細かく記されている。本作にも、納められた道具類は、香箸・火箸・羽箒・灰押・鶯・銀葉挟・香匙などの七ツ道具をはじめ、香盆・丁子立・香炉・重香合・札筒・香筆筒・香包箱・香包・道具箱・

小刀が揃えられている。

全体が菊花を散らす意匠で統一され、密に蒔き詰めた梨子地に、大小、表菊・裏菊、単・八重のさまざまな菊花が、高蒔絵、金具、切金などの技法でさらに変化が付けられて、描き分けられている。外箱の紐金具にも、銀製の菊折枝があしらわれている。香盆は、梨子地に高蒔絵、平蒔絵、切金、金具、付描などの技法を併用して、流れ落ちる瀑布と空にかかる満月をあらわしている。飛沫の表現には銀鉾を用いている。

この香道具には、内容品のひとつとして新中和門院筆と伝えられる名番五十三首が納入されている。新中和門院(一七〇二〜一七二〇)は、近衛家熙の娘で、徳川家宣の養女となつて中御門天皇の女御として嫁ぎ、後の桜町天皇を産んで間もなく、わずか十九歳で亡くなった。この香道具は、新中和門院の婚礼調度としてあつたえられた御用品と考えられる。

## 11 忍草蒔絵短冊箱

江戸時代(十八世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦四四・九 横二二・二 高八・八

一点

短冊箱は、和歌などを書くのに用いる細長い紙(短冊)を入れておく箱で、短尺箱とも書く。

本作品は、内、外側とも黒地に平目粉(平らに加工した厚みのある金粉)を均一に置いた平目地としている。蓋上面には、対角の隅の位置から中心へと伸びるように忍草と八重葎がそれぞれ平蒔絵で描かれ、その根元の、金地の土坡が身側面下方へと拡がっていく。忍草と八重葎の葉先がしなやかに揺れ動く様を丹念な筆使いによつて、見事に表現している。口縁、底、脚部には錫製の覆輪が被せられている。また、短冊箱は、硯や水滴が具えられた作例が知られるが、この作品にはともなっていない



い。  
ところで、本作品は「二重短冊箱」として伝来しているが、二段ともに底裏に脚が付けられていること、そして保存箱の高さや、文様の土坡がさらに下方へ拡がっている可能性が考えられることから、制作当初は三段に調えられていたと推察される。明治八年に宮内省が買い上げた作品。

## 12 菊花折枝蒔絵文箱

一点

江戸時代(十八〜十九世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦三七・〇 横二五・八 高一五・三

文箱は、書状を入れておくための箱であり、平安時代に成立した『源氏物語』に「大きな沈のふばこ(沈香木)でできた文箱)に封じこめてたてまつり給えり」と見えるように、古くから調度の品として調えられたものであった。婚礼調度の作例では縦に長い、長方形で被蓋造の文箱が具えられている。

本作品は内、外側ともに、濃密に金粉を蒔き詰めた梨子地で、蓋面と側面には金銀の平時絵、薄肉の高蒔絵、付描の技法で大小様々な八重菊の折枝を散らした意匠でまとめられている。身は二段重ねで、それをすっぽりと覆うように深い被蓋があつらえられている。身下段には、十六弁の菊花が透彫りされた銀製の紐金具が装着されている。

この文箱は「文匣」として伝えられてきたが、文箱としては通常のものより幅が広く、二重であること、底板の形状など、特異な形に造られており、他の用途のために使用された箱とも考えられる。御在来の品。

## 13

鳳凰唐草春草蒔絵柵

新井半十郎、川之邊一朝ほか

一基

明治十四年(一八八二)

木製漆塗、蒔絵

縦六一・八 横一七〇・五 高九〇・六

明治十四年開催の第二回内国勸業博覧会に(書柵)の名称で出品された作品。平安時代に貴族の寝殿造りの邸宅で使用されていた調度のひとつ「二階厨子」の形式に倣った柵である。『第二回内国勸業博覧会報書』にも、平安時代末期に編纂された『類聚雜要抄』記載の宮中調度の図を参考に制作されたことが明記されている。形式上は伝統を受け継ぎながらも、文様と技法には様々な要素がとりあわされていることが指摘できる。柵の天板と中段の表面には、黒味の強い青漆地に、鳳凰と唐草文様が研出蒔絵で描かれている。数種類の金属粉を各所に使い分けているほか、唐草の輪郭線は金、銀粉、葉は緑色の色粉、茎は朱色の色粉を蒔いて研出蒔絵としており、さまざまな色彩が効果的に配されていることが認められる。花唐草と瓔珞、瑞鳥の組み合わせは、正倉院文様の引用を想起させる。表面の縁は菱形の桜花繫となっており、金粉の研出蒔絵と銀平文による桜花が交互に置かれ、その界線は朱色粉の研出蒔絵となっている。几帳面は金地に唐草が付描で描かれ、裏面は全面に平目粉が隙間無く置かれる。柱や柵板縁は麒麟に霊芝の染織文様を引いている。厨子扉、側面、背面の意匠は一転して、装飾的な地文に、春蘭や福寿草、菜の花、桜草、蕨、蓮華草などを写實的に描く。茶色の漆地に様式化された花と唐草を黒漆で描き、梨子地粉を蒔いて、平滑に研ぎ出している。春の草花には、色漆を多用し、高蒔絵や変塗りの技法が駆使されて、色鮮やかに仕上げられている。厨子内側は、全面を霞文の叢梨子地とし、特に扉内側は、切金を置いて、蝶を散らす。厨子の表と内側で、春霞のもと、花に蝶が集まる様子があらわされている。

金具は赤銅に魚々子を打ち、鍍金された桐紋を、各所に象嵌したもので、厨子扉には鎌子(錠前)を付ける。

柵背面左下隅に蒔絵銘があり、「大藏省商務局圖本、新井半十郎製、蒔絵川之邊源次郎、全上田金三郎、全鹿島佐助、木工竹中熊次郎、漆工中平鉄五郎、金工須藤伊之助」と記されている。新井半十郎は当時、東京大伝馬町に店を構えていた漆器商で、各分野の職人の仲介に立ち、数多くの作品を委嘱し、意匠の決定にも大きく関与していた人物と考えられる。川之邊源次郎は、川之邊一朝(一八三〇〜一九一〇)の幼名である。嘉永三年には父の名前を襲名して平右衛門と改め、一朝と号している。従って本作品の銘に見られる「源次郎」は一朝の息子の可能性もあるが、『第二回内国勸業博覧会出品目録』には「蒔絵工川之邊一朝」と記載されており、本展ではこの表記に従った。

銘の筆頭にある「大藏省商務局圖本」の記載を裏付ける資料が『温知図録』(東京国立博物館所蔵)中に見いだされる。本作品の部分と同文様を描いた図案が収録されているのである(参考図版30頁)。「温知図録」は、明治八年から十四年頃にかけてまとめられた八十四帖からなる図案集で、博覧会事務局(内務省管轄)と製品画図掛(内務省、大藏省、農商務省と管轄が移動している)の官員が編纂したものである。当時、明治政府がとっていた殖産興業、輸出奨励政策を背景に、博覧会に出品する工芸品、あるいは貿易品制作の意匠指導がその目的にあった。

古式から引用した形式と復古調の文様に、従来見られる唐草や花菱文様に新意を加えた装飾的な地文、さらには、写実性のある濃い絵画的な表現を取り合わせた本作品の意匠には、明治政府が主として輸出向けに目指した日本の工芸品の在り方が、具体的に現れているといえよう。

14 四季草花蒔絵棚 佐々木高保

一基

明治二十八年(一八九五)

木製漆塗、蒔絵

縦四〇・〇 横八三・五 高八三・九

明治二十八年に開催された第四回内国勸業博覧会に三宅利右衛門が『蒔絵四季草花書棚』の題名で出品し、妙技三等を得たと考えられる作品。元東宮職所管であったことを示す本作品の伝来記録等には、宮内省が明治三十六年に買上げたことのみ記され、同博覧会の出品作であることが明記されていない。しかし、『日本漆芸会誌』明治四十年第八十一号の記事は、本作に相当すると考えられる「皇太子妃殿下の御料品」が同博覧会出品作と伝えている。

均一に仕上げられた梨子地に薄く肉上げされた高蒔絵によつて、四季を彩る六十種あまりの草花が繊細かつ写実的に描き出されている。下段の引出しの図様は、研出蒔絵によつて流水が左から右へ流れるように構成され、その脇には杜若や河骨などの夏の水草が咲き乱れる様子が描かれているが、引出しを開けると、引出しの外部側面にまで、流水の文様が繋ぎついでいくように、蒔絵が丁寧に施されている。天袋の四枚の引戸、厨子扉はいずれも、数種類の菊の文様でまとめられており、各所に装着された銀製の金具も、菊の折枝の意匠である。全体に四季の草花を散らしながらも、特に菊を正面に配している。全体に写実的な描写の草花を描きながらも、柱や、扉縁には江戸時代後期の棚に典型的な七宝繫文を置いている。厨子扉内側には、檜垣に桜、山に桜と松を描き、金の板を彫り抜き貼り付けた四文字「今靡(く)なり」を配して、和歌に題材をとった葦手絵としている。『日本漆芸会誌』の記事によれば、四季草花の下絵は鈴木華邨、厨子扉内側は前田香雪の発案により、勅撰和歌集『風雅集』より花園院の御製「あしはらやみだれし国の風をかへて民のくさ葉もいまなびくなり」の歌をあらわしたものである。

明治二十八年は日清戦争終結の年であり、この歌意と当時の情勢を結びつけ、厨子扉内側にこの意匠を配したことが記されている。

作者の佐々木高保(一八四五―一九二九)は弘化二年、京都の蒔絵師の家に生まれた。屋号は伊勢屋と称し、三宅利右衛門の嘱託を受けて、宮中調度の蒔絵制作に従事した。明治維新後、東京遷都にともない、先に東京へ移住していた利右衛門の要請をうけて、明治四年に上京し、その後は利右衛門を通じて宮内省の依頼を受け、馬車や、御所の室内装飾、道具類の蒔絵制作に携わるようになった。内外の博覧会への出品、受賞も多く、明治二十三年日本漆芸会発足の発起人のひとりであり、三十一年からは東京工業高等学校で蒔絵を教授し、後進の指導にあたった。本作は、現在知られている高保の作品の中でも、大作のひとつと言えよう。

15 秋草流水蒔絵螺鈿棚 川之邊一朝

一基

明治二十八年(一八九五)

木製漆塗、螺鈿

縦三六・二 横八〇・七 高六一・六

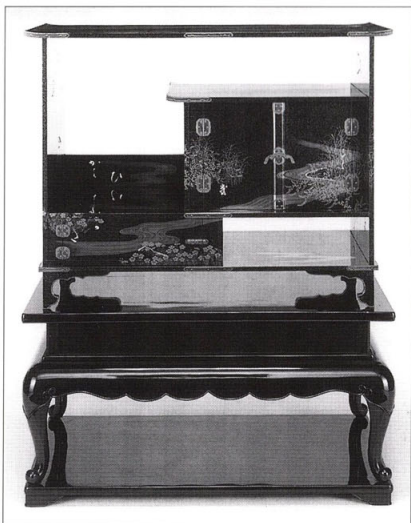
中段右に両開き扉の厨子、下段右に片開きの厨子を置いた三段の棚。全体を黒地とし、まばらに金の梨子地粉を蒔いて黒一色の中にも変化を付けている。天板は金銀粉を蒔きぼかして、霞としている。厨子扉、棚板には流水を研出蒔絵の技法であらわし、中段の扉には萩とすすきを、下段には撫子の花を描きあらわし、その中に厚い貝板を使った螺鈿で、「すすしきかたへ」の文字を散らしている。中段右棚板には高蒔絵で「の」、中段境板には「かよひ」、左脇板は「風や」の二文字、右脇板には「ふくらん」の四文字が透かし彫りで配されている。これらの文字から、棚全体を通じて歌意をあらわしていることがわかる。金具は特に地文がなく、銀製で、四つ菱の鉾が打

たれている。黒塗りの台が付属しており、伝統的な形式の棚にもかかわらず、さらにこの台にのせて使用していたことが窺われる。

作者や制作年代、宮内省に収められた経緯などの伝来記録は残されていないが、『第四回内国勸業博覧会審査報告』記載の『蒔絵夏秋草書棚』の意匠、技法に共通していること、そして文様自体は簡素ながらも、作品全体の完成度には高いものが見られることから、明治二十八年第四回内国勸業博覧会の出品作の可能性が考えられる。

同博覧会の『審査報告』によれば、意匠の考案は岸光景、歌は『古今和歌集』より「夏と秋とゆきかふそらのかよひぢはかたへすすしき風や吹くらむ(凡河内躬恒)」と記される。夏の花、撫子とまだ穂の若いすすき、花がまだつぼみの萩の様子を描いて、晩夏立秋の時をあらわしている。出品者は小池有終、蒔絵工は川之邊一朝である。文字を透かした部分には、全て銀覆輪が被せられているが、その制作には納多次郎があたった。透かした小さな文字の内側に銀を被せたその確かな技術が、審査員の認めるところとなり、妙技二等に選ばれたという。

なお、本作品には、専用の飾台が付属している。



16 菊蒔絵螺鈿棚

川之邊 一朝ほか

一基

明治三十六年(一九〇三)

木製漆塗、蒔絵、螺鈿

縦四六・八 横二三五・五 高二二・〇

明治二十五年(一八九二)に宮内省が東京美術学校(現東京芸術大学)に図案を依頼して以降、明治三十六年十一月の完成まで、その制作に十一カ年が費やされた作品。文献には《菊花蒔絵御書棚》や《菊蒔絵螺鈿御書棚》などの名称が見られる。三段の厨子棚形式で、中段向かって右、下段左に厨子が付き、菊の花畑とそこを飛び交う小鳥で構成された意匠が全面に展開する。厨子内側や天板の裏側に至るまで同一文様で、隅々まで均質に仕上げられている。金地とし、平日粉をひとつずつ間隔をあけて置く。菊は、花弁や葉の部分で薄く漆で盛り上げてから金粉を蒔き付け、花の重なりで立体感を持たせた高蒔絵の技法が駆使されている。蒔絵に螺鈿技法を併用していることも、この作品の特徴である。硬い貝板を文様の形的確に切り、豊富かつバランスよく配している。貝は夜光貝で、漆の地に埋め込まれて研ぎ出されており、貝の上にもさらに蒔絵が施されている。扉の縁や柱などの角でも貝を隙間なく自在に繋いでいるなど、その技術の高さが窺われる。

宮内省より棚の図案を依頼された東京美術学校では、棚の形式は古式に倣うこととした。大正元年の『日本漆工会雑誌』第四百十号には「春日隆能の源氏古繪巻圖を参考」に構成されたことが記され、平安時代に成立した『源氏物語繪巻』に描かれた調度を参考としたと考えられる。蒔絵の意匠は、校内で懸賞をかけてデザインを募った。その結果、後に同校教授となる六角紫水の図案が採用された。当時、紫水は二十六歳、漆工科を卒業したばかりだったが、図案の採用を受けて、その後、一年をかけて棚と金具の製図に取り組みことになる。菊の花畑と鳥の文様は、厨子扉の表から内側へ、天板の表から裏

面へと全て連続するように構成されており、柱も例外ではない。計算し尽くされた、下図の完成度の高さが窺われる。紫水の自伝によれば、この棚の制作は明治天皇の御下命によるものであり、宮内省内に特別に細工所が設けられ、直営のもとに作業が行われ、蒔絵材料の金粉もここで作られたという。

蒔絵は川之邊一朝とその一門の蒔絵師十一名、金具は海野勝珉が担当した。いずれも明治二十九年、帝室技芸員に任命され、東京美術学校でも教鞭をとった明治期を代表する作家である。この他、伝来記録には木地・竹中熊次郎、塗師・吉田清次郎、螺鈿師・片岡源次郎、金物師・高橋定吉の名前が残されている。

当時の技術の粋が集められた、明治期の漆工作品のなかでもとりわけ卓越した作品である。

17 山水筏流蒔絵棚

一基

明治(十九世紀)

木製漆塗、蒔絵

縦三三・五 横七〇・五 高五九・七

紅葉と、流水に筏を主体とし、遠山、松や柏など吉祥を象徴する植物を全体に描き表した棚。流水は研出蒔絵と付描、筏は高蒔絵の技法で、金や銀、青金など色彩の異なる金属粉を使い分け、岸辺に配された楓、松や銀杏などの木々、その下草に至るまで、繊細に描きだされている。棚板の裏側と厨子内部は梨子地である。柱や棚板の縁などは、七宝繫文で統一されている。金具も同じ文様だが、下段右の厨子の懸金具と、下段左に置かれた二段の引出しの引手金具には菊花の意匠が用いられている。

意匠や、繊細な筆使いの見られる蒔絵、伝統的な七宝繫文には古様が窺われる棚である。伝来の詳細は不明。

18 桑木地飾棚

伊藤平左衛門(九代)

一基

明治四十年(一九〇七)

木製(桑)

縦四一・七 横九七・五 高九二・二

本作品は、明治四十年に華族一同から宮中へ献上された作品である。さまざまな棚飾り品が付属している(出品番号19)。献上目録には当時、帝室技芸員に任命されていた二十五名の名前が連ねられている。献上目録の記載内容も、著名な作家による制作であることが強く意識されたものとなっており、制作の目的も帝室技芸員全員の合作品の献上にあったことが明らかである。例えば、棚飾り品のうち、硯箱と付属の水筒、刀子は通常はひとつの作品として扱われるが、献上目録にはそれぞれが別の作品として記載されている。この棚の構想がどこから生まれ、それぞれの棚飾り品の意匠が決定された背景についての詳細は、明らかでない。棚および個々の棚飾り品には、作者の銘は入れられておらず、題材も意匠もそれぞれ異なるものである。また、ものによっては、完成度の点からみても、各作者の技量が充分に発揮されているとは必ずしも言うことはできない。しかし、これらが組み合わされて棚に飾り付けられたときに、ひとつの調和がかたちづくられたことは確かである。それぞれの作品が、明治期の各分野を代表する美術家によるものであり、全体がまとめられた時に、合作品という点において、貴重な事例である。伝来記録には、これらの棚および棚飾り品は、一九一六年に開催されたパナマ太平洋万国博覧会に貸し出され、展覧されたことが記載されている。

棚本体は建築の分野で明治二十九年に帝室技芸員に任命された九代伊藤平左衛門(一八二九―一九一四)の制作による。平左衛門は名古屋に生まれ、東本願寺の本堂、大師堂、紀州高野山の金堂等を建築し、多くの社寺修理、設計にも携わった。第三回、四回内国勸業博覧会

では建築の雛形を出品し受賞している。

本作品は三層の厨子棚形式で、向かって中段右、下段左にそれぞれ両開きの扉の厨子が付けられている。扉や棚板を囲む結界に施された透かし模様は、江戸時代初期の茶人、小堀遠州が好んで使用した棚に共通しており、平左衛門は、遠州好みの棚を参考に、本作品を考案したことが窺われる。桑材を使用しており、赤銅の金具を付ける。

### 19 桑木地飾棚付属 棚飾り

明治四十年(一九〇七)

19-1 鶴亀置物 高村光雲・竹内久一 一對

木彫 彩色  
高一八・四

能楽「鶴亀」を題材に、演者が舞う姿を捉えた作品。鶴を高村光雲(一八五二〜一九三四)が、亀を竹内久一(一八五七〜一九一六)が担当している。いずれも、彫刻の分野で帝室技芸員となり、東京美術学校でも教鞭をとった近代の代表的な木彫家として知られる。檜で彫られた像には、鮮やかな彩色が施されている。「鶴亀」は正月に舞われる演目で、特に物語はなく、唐の皇帝が宮中で新春を言祝ぐ様を表現した吉祥の舞である。この作品は子方(子供)が演じる様子をあらわしており、従って能面は付けていない。

19-2 桜花白磁香炉 清風與平(三代) 一点

陶磁  
徑二二・五 高一二・六

三脚の付いた香炉で、銀製の雲を透かし彫りにした火

屋を付ける。白磁に器胎と同じ磁土を使って、文様の部分を盛り上げることで、山桜が咲く様子を浮き彫りのように表している。

作者の三代清風與平(一八五一〜一九一四)は明治二十六年に陶磁の分野で初めて帝室技芸員に任命されている。中国陶磁を中心に真摯に釉技の研究を深め、白磁を基本としつつ、絵画的な意匠を施した独自の作陶の世界を生み出していった。特に、淡紅色が美しい旭彩釉の技法による作品が知られている。

19-3 双蝶七宝香合 清川惣助 一点

七宝  
縦六・四 横六・七 高一・四

淡い黄色の地に、二頭の蝶の姿があらわされた香合で、銀の覆輪をつける。作者の清川惣助(一八四七〜一九一〇)は、東京で活動した七宝作家で、明治二十九年には、京都の並河靖之とともに七宝の分野で帝室技芸員に任命されている。文様の輪郭に金属の区画線を用いない無線七宝の技法を確立し、絵画的な表現を追求した。

19-4 古今集蘆手蒔絵香盆 川之邊一朝 一点

木製漆塗、蒔絵  
縦二五・八 横三三・六 高一・九

黒地に梨子地粉を霞に蒔き暈かし、中央には広げた扇を置いて、扇面に「しるひとそ」の文字と梅枝を描いた香盆である。『古今和歌集』から「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる」(紀友則)の歌意の蘆手絵となっている。川之邊一朝は、明治二十九年に、池田泰真(一八二五〜一九〇三)とともに、蒔絵の分野で初めて帝室技芸員に任命されている。一朝は江戸浅草に生

まれ、徳川幕府の御用蒔絵師幸阿弥因幡の蒔絵仕手頭武井藤助について蒔絵を学び、明治維新前は、和宮の婚礼調度品をはじめ、大名家の蒔絵に従事した。明治維新後は宮内省の仕事に数多く携わり、内外の博覧会へ出品を続けた。その中でも本展で出品している《菊蒔絵螺鈿棚》(出品番号15)は一朝の代表作として有名である。なお、蘆手は「葦手」と記載されることの方が多く、本展の作品名は、本作品の献上目録の表記に従った。

19-5 牡丹折枝印篋鏡板 海野勝珉 一点

彫金  
縦一一・二 横一九・三 高一八・八

印章(作品番号19-6)を納めた篋鏡で、その蓋表にはめ込まれた鏡板に牡丹の折枝が刻まれており、この彫刻を海野勝珉(一八四四〜一九一五)が担当している。花の部分には金、銀が象嵌される。海野勝珉は明治二十九年に加納夏雄に続いて、彫金の分野で二人目の帝室技芸員に任命された。多彩な彫金技術を持ち、特に象嵌には高度な技量を示した。代表作のひとつに当館蔵《太平楽置物》(一九〇〇年パリ万国博覧会出品作)がある。

19-6 獅子鈕銅印 鈴木長吉・中井敬所 三顆

銅鑄製  
高九・四

獅子の鈕(つまみ)のついた三顆の印章で、鑄造を鈴木長吉(一八四八〜一九一九)、篆刻を中井敬所(一八三二〜一九〇九)が担当した。印文は、「惟天祐于一徳」「惟民婦于一徳」「共和萬邦」である。書経(中国最古の教典、尚書ともいう)の中に見える雅語より引かれた言葉と考え

られる。鈴木長吉は蠟型鑄造を得意とし、鶯、鷹など動物を写実的にとらえた作品を多く残した。明治二十六年、シカゴ・コロンプス博覧会に出品した十二羽の鷹が絶賛され、日本の鑄造技術の高さを世界に示した。明治二十九年に鑄造の分野で帝室技芸員に任命されている。中井敬所は維新後、中国の篆法を研究し、多くの印章を制作するとともに、鑑識にも長じていたといわれる。明治二十九年に篆刻の分野で唯一、帝室技芸員に任命された。

19-7 龍青華肉池 宮川香山(初代) 一点

陶磁 径一〇〇 高三一

薄手の白磁の器体に、宝珠とそれを取り囲むように朱と青の龍を交互に六頭描き配した肉池。采肉入れである。作者の初代宮川香山(一八四二—一九一六)は、京都に生まれ、横浜へ移り真葛焼を開き、その作品は海外へも数多く輸出された。作風は幅広く、明治二十年代に入ってから中国陶磁の研究に専念して、新たな境地を切り拓いた。明治二十九年に、三代清風與平に続いて陶磁の分野で二人目の帝室技芸員となった。

19-8 松波蒔絵硯箱 白山松哉 一点

木製漆塗、蒔絵 縦二四・六 横三一・五 高四・八

19-9 蛇籠千鳥水滴 香川勝廣 一点

銀製彫金 縦二・五 横六・一 高一・四

蓋表に、二枚の色紙形を配し、その中に松と波を描いた硯箱で、蓋を開けると、蓋と身の内側には、一面に研出蒔絵で波頭が描かれている。蒔絵は白山松哉(一八五

三—一九二三)による。硯箱には、現在、水滴と硯、筆二本が具えられており、水滴は香川勝廣(一八五三—一九一七)が担当した。銀製で、蛇籠とその上にとまる二羽の千鳥が彫り出されている。その他、制作当初は刀子二口(それぞれ宮本包則、月山弥五郎の作、刀子の鞘は七宝で、並河靖之の作)が本作品に具わっていたことが献上目録から知られる。

19-10 鹿鎮子 石川光明 一点

牙彫 高一〇〇

靈芝をくわえ、体を横たえた鹿を牙彫であらわした作品で、鎮子として作品番号19-11の画帖にともなう。

作者の石川光明は明治二十三年の第一回目の帝室技芸員選出の際、彫刻の分野で高村光雲とともに任命された彫刻家である。江戸浅草の宮彫大工の家に生まれ、木彫も修めたが、明治初期、牙彫の隆盛のなかで牙彫家として名を成した。その繊細な彫技により、鹿の姿が細密にあらわされている。

19-11 古今集歌絵畫帖

川島甚兵衛(二代)・荒木寛政ほか 一帖 綴錦、絹本着色 縦三〇・四 横三六・五 高五・五

古今和歌集から画題をとり、歌絵として、八名の日本画家により、四季それぞれの歌の内容を描いた作品八図が納められている。荒木寛政、野口小蘋、望月玉泉、熊谷直彦、岸光景、今尾景年、川端玉章、橋本雅邦がそれぞれ担当した。表紙、帙の装幀は綴錦で仕立てられており、いずれの綴錦も、二代川島甚兵衛(一八五三—一九一〇)による作品である。

20 若松菊山水蒔絵棚 一基

明治(十九—二十世紀)

木製漆塗、蒔絵 縦三七・五 横七一・〇 高六七・二

棚全体に遠山と、流水に菊、若松の図様をあしらった棚で、伝統的な吉祥の文様でまとめられている。棚板の裏と厨子内部は、円文を基本とした叢梨子地としており、柱は花菱繫文で統一されている。菊花は金、銀、青金など合金比の異なる蒔絵粉で、色に変化を付けて描きあらわされており、土坡には切金が置かれる。厨子の懸金具は菊枝で、他の金具も、菊に唐草の文様が刻まれている。

地板の縁には、柱と同じ連続文様を施す作例が多いが、本作品では棚板表と同じ土坡と菊の文様が配され、新意が認められる。しかし全体に意匠は堅実で、伝統的な棚形式を引き継いでおり、制作年代は遡る可能性があり、技法や意匠についてさらに調査を進め、検討する必要がある。

明治四十一年四月、皇太子(大正天皇)が山口、徳島の両県に行啓した折に、公爵毛利元昭より献上された作品。

21 網代蔦蒔絵棚 大垣昌訓 一基

大正三年(一九一四) 木製漆塗、蒔絵、七宝 縦四〇・三 横八七・〇 高七八・五

本作品は、大正三年に開催された東京大正博覧会に《都の秋蒔絵書棚》の作品名で出品された棚である。網代の上に伸びた蔦が秋になって紅く色づき始めた様子を棚全体にあらわす。地文様は、網代の他に、二種類の花を長方形に意匠化して繋げた文様があり、棚板と側面の各面で、網代と交互に見えるように配されている。地文

様は研出蒔絵、蔦は高蒔絵の技法であらわし、実の部分には珊瑚や貝、金属等を象嵌している。柱には貝と金属の薄板を細く、短冊状に切ったものを線に繋げて置き、縞模様になっている。引戸の右下隅に「大垣清遠作」の朱漆銘がある。金具は、制作当初に比べ金属の部分が経年変化により変色しているが、花形の文様に赤色の釉が認められ、作者の大垣昌訓（一八六五～一九三七）が考案したと伝えられる大垣漆七宝の技法によるものと考えられる。『日本漆工会雑誌』によれば、漆七宝には、通常の七宝のようなガラス釉は用いられず、酸による腐食や、色漆を高温で金属に焼き付けるなどの技法が用いられている。全体に色彩豊かで華麗な、さまざまな技法が駆使された棚である。宮内省に入った経緯や年代は今のところ明らかでない。なお、『東京大正博覧會美術館出品図録』の出品当時の写真には認められない、後補と思われる専用の台が当館に伝えられている（左図）。台にのせると、地板が七宝文に透かし彫りされていることがよくわかる。

昌訓は金沢に生まれ、明治十三年、十六歳で高田河月のもとに入門して蒔絵を学び、二十四、五歳頃に独立したと言われる。内外の博覧會、共進會、展覧會に出品、数多くの受賞を受けている。金間法、置霜法を考案する



など、蒔絵技法の改良に努め、意匠にも常に斬新さを求めた。また、宮内省関係の仕事を数多く手がけていたことが知られる。『金沢市統計書（大正三年）』によれば、明治二十五年に「大垣工場」を開設、「漆器及漆七宝制作」を業とし、職人を五人常雇いしており、自らが作家であると同時に、工場の経営者、デザイナーとして作品の制作、指導に当たること、多くの作品注文に応え、この棚のような大型の作品もこなしていた様子が窺える。現在知られている昌訓の作品は少なく、本作は貴重な作例と考えられる。昌訓が遺した履歴によれば、大正元年十月末にこの棚の初式を行った記録があり、二年近くの月日をかけて制作された。

## 22

楼閣山水木彫堆黒棚

明治大正十九～二十世紀

木製漆塗

縦四〇・八 横八九〇 高七七・七

一基

細かく文様を木彫りした後に、黒色漆塗を施し、一見すると彫漆（漆を塗り重ねた素地に文様を彫刻する）作品のように仕上げた棚である。同様の技法は鎌倉彫や、讃岐彫、村上堆朱など、日本各地の漆工品の産地に見ら



背面中央下部／銘

れる。厨子扉には楼閣山水が彫られ、蝙蝠の懸金具を置く。扉内側には梅、菊、若竹、春蘭を彫り、四君子の図様とし、向かつて左側面には双鶴に流水、松、笹、牡丹、右側面には岩に春蘭を、柱や棚板の縁周りは菊花が彫り込まれ、全体が中国の吉祥の意匠でまとめられた棚である。天板、背面には何も文様を施さず、漆塗りで仕上げられている。背面下部に朱色漆で印が入れられているが、作者についての詳細は不明である。

## 23

桑木地透彫棚

前田南齊

大正四年（一九一五）

木製（桑）

縦一八・九 横五八・一 高五五・二

一基

桑の木の美しい木目を生かした小振りの棚で、全体に拭漆を施し、厨子扉、下段の結界、地板下の幕板にそれぞれ、花菱と菱格子、青海波の透し文様を配している。

作者の前田南齊（一八八〇～一九五八）は静岡に生まれ、萩谷幸作、安保木方斎に師事し、明治三十四年に指物師として独立した。国内外の展覧會で受賞しており、日本美術協会の委員をつとめるなど、大正、昭和期を代表する作家のひとりである。多くの後継者を育てたことでも知られる。その作品には桑、桐の最良材が用いられ、堅実な作風が特徴である。特に、桑樹匠と呼ばれたように、桑の指物を得意とした。

本作品は、大正四年に開催された東京彫工会展覧會に出品され、宮内省に買い上げられたという記録が残されているが、文献でこれを確認することはできない。しかし、大正七年、八年に開催された第三十一回、三十二回展覧會の『東京彫工会展覧會報告』によれば、南齊は桑の棚を続けて出品して受賞しており、また審査員をつとめていることから、本作品が大正四年の出品作である可能性は高いと考えられる。

24 舞楽時絵棚 西村彦兵衛(八代) 一基

昭和三年(一九二八)

木製漆塗、蒔絵

縦四六・二 横二二〇・八 高二二・〇

館蔵の中でも大型の棚のひとつで、昭和大礼を奉祝して昭和三年に三井家より皇室に献上された作品。『源氏物語』より意匠がとられており、胡蝶など、舞楽の各場面が描かれる。天板、中段の棚板には龍頭鶴首の舟に乗った姿が配されている。さまざまな蒔絵技法とともに、各所が彫金によって微細に表現されており、金属の輝きが一段と強調されている。また、貴石の象嵌、螺鈿技法の併用によって、色彩も華やかに仕上げられた棚である。

框座底裏に「平安象彦謹製 印」の蒔絵銘があり、京都の漆器商、西村彦兵衛商店(株式会社象彦)の制作による作品である。当時、象彦は三井家から作品注文を数多く受けており、制作に際して材料を提供されたことも少なくなかったという。

初代彦兵衛(一七一九〜一七七三)は滋賀の出身で、京都に出て、象牙屋北本家に奉公し、その後、主家の跡を継いで象牙屋彦兵衛と称した。三代彦兵衛の時から象彦の屋号で漆器商を営んだ。本作品は、八代彦兵衛(一八八七〜一九六五)の時にあたる。八代彦兵衛は若年より象彦を継ぎ、蒔絵技法の研究を重ねた。制作した作品は数多く、漆工競技会では受賞を重ねている。また、大正五年に美術蒔絵学校を設置するなど、後継者の育成にとめたことでも知られる。

今回、本作で使用された置目(下絵の線を、紙の裏から漆でなぞって、素地に下絵を転写したもの)が、象彦に保管されていることが明らかになった。

置目/上段引戸 (株)象彦所蔵

25 牡丹螺鈿棚 五十嵐三次 一基

昭和八年(一九三三)

木製漆塗、螺鈿、蒔絵

縦三三・五 横九六・二 高六五・〇

外側は弁柄を混ぜた漆塗とし、厨子扉の凹文と内側の黒漆塗とで、赤と黒の色の対比が印象づけられる作品である。棚の形式も、伝統的な形から離れて、角には丸みが付けられた飾棚となっている。厨子扉には、螺鈿で牡丹の模様が置かれ、花芯は蒔絵で描かれている。螺鈿は、貝を貼り付けた後に、漆で塗り込め、貝の上の漆塗膜だけを剥ぎ起こす技法によって施されている。棚の両側面にも意匠化された牡丹の蕾が配される。本作品は昭和八年に開催された第十二回朝鮮美術展覧会に《漆器牡丹文棚》の名称で出品され、宮内省の買い上げを受けた。

厨子扉の螺鈿による牡丹の文様は、李朝時代の螺鈿作品に特徴的な牡丹唐草の意匠から構想を得ていると思われ、赤と黒の効果的な色の配置も、朝鮮半島の工芸品に着想を得ていると考えられる。

作者は、大正六年頃より『日本漆工会雑誌』に朝鮮半島における漆の採取試験について報告を重ねており、朝鮮半島における漆樹の栽培、漆液の生産に当時、深く関わっていたことが窺われる。

26 鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚・鶴桐蒔絵螺鈿飾棚 付属飾り 島田佳矣ほか

昭和三年(一九二八)

(参考) 鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚 縦五〇・三 横一五〇・三 高

一五六・〇

鶴桐蒔絵螺鈿飾棚 縦五〇・三 横一五〇・三 高

一五六・〇

大正十三年、皇太子御成婚(昭和天皇)を奉祝して、当時の文官、武官一同から飾棚、棚飾り品の目録が献上さ

れ、その後、東京美術学校（現東京芸術大学）に制作委嘱がなされた作品群である。完成は昭和三年十一月、皇室に納められたのは翌年四月のことである。『御成婚奉祝献品図録』に記載された工芸家、画家、意匠家らの名前は一三七名にもものぼる。この時、その中心となって制作の指揮にあたったのは、図案科教授の島田佳矣（一八七〇—一九六二）と考えられる。当時、東京美術学校では、明治二十三年の楠木正成の銅像制作に始まり、宮内省や東京市などの作品制作の委嘱を受けることが多く、大正、昭和期、正木直彦が校長の時には委嘱制作が盛んに行われたという。

棚二基と棚飾り品は、それぞれ、昭和天皇、香淳皇后へ献上されたもので、天皇の棚は鳳凰と菊、皇后の棚は鶴と桐の文様が、蒔絵と螺鈿で装飾されている。いずれも図案は島田佳矣、《鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚》の蒔絵は河面冬山ほか六名、螺鈿は片岡華江、《鶴桐蒔絵螺鈿飾棚》の蒔絵は梅澤隆真ほか六名、螺鈿は浅見清壽が担当している。それぞれの棚飾り品は、当時の著名な工芸家によって分担制作された。全体に棚飾り品の意匠は、各棚によってそれぞれ、剛健さ、あるいはたおやかな美しさを意識してデザインされており、特に香淳皇后に献上された棚飾り品には、刺繍写真立や染織百五種が揃えられた錦綾帖、さらには実際に使用されることはなかったと思われるが、裁縫道具や化粧道具が調えられ、各作品とも、優雅で繊細な意匠でまとめられている。これらの全体の配置、作品の内容も二基の棚との間で対称となるように計算されており、島田佳矣の構想によるものであろう。なお、参考図版（頁52—53）には、棚飾り品をすべて飾り付けた完成当時の写真を掲載しているので、参照されたい。

棚と一部の棚飾り品については、現在宮殿に配置されているため、当館で紹介することはできないが、棚飾り品については、幾つかこれまでも当館の展覧会で紹介し

ている。例えば、東京美術学校教授であった松岡映丘をはじめ、総計十二名の画家によって描かれた合作画卷《現代風俗絵巻》や、陶磁で帝室技芸員に任命されていた板谷波山の《彩磁花鳥花瓶》などがある。本展では、棚飾り品の中から、当館ではこれまでに出品していないものを中心に選び、紹介することとした。

同じ作家の、他の作例と比べてみても、伝統的で荘厳な意匠の作品が多く、奉祝献上を意識していることが強く感じられる。しかし、いずれも完成度の高い優品であり、すべてが飾り付けられた際には、調和が保たれた作品として全体が完結しており、その意味では、日本の近代工芸の中でもひとつの頂点を示す作例として位置づけられよう。

26-1 胡俗楽苑七宝飾 III（鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚 付属） 稲葉七穂 一点

七宝 径二四・九 高二・二

千夜一夜物語の一節を思わせるような異国の庭園風景が、金銀線を使った有線七宝の技法により、色鮮やかに描き出された七宝皿である。周縁部は様式化された植物の文様を、大胆に割り付けている。裏面には、唐草文が配され、高台内に、「稲葉作」の銘が記される。作者の稲葉七穂は、京都で稲葉七宝店を営み、棚や箆笥などに七宝技法を用いる家具七宝で知られた。

26-2 藤菖蒲螺鈿軸盆（鳳凰菊蒔絵螺鈿飾棚付属） 豊川楊溪 一点

木製漆塗、螺鈿

縦三八・一 横一三・九 高二・八

螺鈿で全体が装飾された軸盆。表の見込みには、水辺

に咲きそろう菖蒲の花と、その上に藤枝が垂れ下がる様子が表されている。盆の立ち上がり部分には流水の上を飛び交う燕が配され、初夏の清々しい空気を伝えている。裏面には水面にできる輪を様式化した文様を散らして、立ち上がり部分には表とは対照的に水に泳ぐ鯉の群が配される。

螺鈿に使用された貝は、ごく薄く加工されたもので、貝の裏には白の彩色を施しており、貝を通して見える白色によって、貝の輝きが効果的に表されている。作者の豊川楊溪は、腐食螺鈿の技法を得意としており、本作品もその技法が使われていると考えられる。腐食螺鈿とは、貝に漆で文様を描き、酸で腐食させる技法で、漆の付けられない部分に酸が溶けることで透かし文様ができ、精緻な文様表現が可能となる。

本作品は、本展では出品していない合作画卷《現代風俗絵巻》を載せる軸盆として制作された（左図）。

《現代風俗絵巻》を載せた姿



26-3 玳瑁化粧具箱・化粧道具(鳳凰菊時絵螺鈿飾棚付属)

森田佳鳳・江崎栄造 一点

玳瑁  
縦二・六 横三・五 高九・五

櫛や手鏡、ブラシなど、身を整えるための道具類を納めた箱。つがいの鴛鴦と菊花の文様が配されている。素材は玳瑁で造られており、文様の部分には、線刻を施した螺鈿や彫金を象嵌している。玳瑁の中でも、黄色の、光が透過する部分を窓のように配して、素地を造り上げている。意匠は森田佳鳳、制作は江崎栄造が担当した。

なお本作は、昭和四年に刊行された『御成婚奉祝献品図録』では、『玳瑁装身具』の名称が付されている。

26-4 褥(鳳凰菊時絵螺鈿飾棚付属)

山鹿清華 十二点

26-12 褥(鶴桐時絵螺鈿飾棚付属)

山鹿清華 十点

褥とは敷物のことで、本作品は、棚飾り品のなかでも、上層部に飾られた、壺や皿、置物を棚の上に載せる際に用いる敷物として制作された。綴織や、レース、染革、刺繍、手織錦など様々な技法、材料によって造られ、その意匠も、作品によって、日本の伝統的な流水文や、菊花の他、中国的な龍、宝尽、西洋的な様式化された花文様などに分けられる。

作品番号26-4(全十二点)には紫色の裏地、作品番号26-12(全十一点)には紅色の裏地を付け、それぞれ、載せられる作品の名称と、「褥 清華作」の銘が刺繍で入れられている。作者の山鹿清華(一八八五—一九八二)は、京都で活動した作家で、一九二五年のバリ万国裝飾美術工芸博覧会でグランプリを受賞し、昭和二年第八回帝展に

新設された第四部(美術工藝)で特選となるなど、内外の展覧会に出品、受賞を重ねた。

26-5 春秋刺繍写真立(鶴桐時絵螺鈿飾棚付属)

渡邊松華・黒田橘郎 一对

絹、刺繍  
縦二・四 横一・八

春と秋の草花が刺繍された一对の写真立て、銀の縁を付け、裏の脚部は梨子地で仕上げられている。春の写真立には桜、すみれ、桜草、藤や蓮華草など、秋の方にはすすき、桔梗、蔦、女郎花、菊、竜胆などが色糸や金糸で鮮やかに表される。その地はそれぞれ、浅黄色と薄紅色で、すべて刺繍で縫い取られている。背面に、春には「松華謹作」、秋には「橘郎謹作」の銘が記されている。ちなみに献上当初、本作品は、棚の中央に載せられており、もうひとつの棚、鳳凰菊時絵螺鈿飾棚には、同じ位置に同形式の写真立が配されている。こちらは、彫金で造られた、菊と桜の意匠である。

26-6 宝相華磁器香炉(鶴桐時絵螺鈿飾棚付属)

石野龍山 一点

陶磁  
径二・八 高一〇・六

白い素地に青藍釉をかけた作品で、三脚をもつ。宝相華を薄く盛り上げた文様が、胴の回りに三カ所に配され、蓋には、蓮のつまみの周りに、唐草が透かし彫りされている。作者の石野龍山(一八六一—一九三三)は金沢に生まれ、はじめは絵画を学び、その後、明治十六年より、陶画を生業とした。各色の釉薬を生み出し、九谷焼にこれまでなかった色彩を与えた。農展(農商務省図案及应用作品展覧会)の第一回展(大正二年)に出品のほ

か、昭和七年には帝展の無鑑査に推薦された。

26-7 双鳥堆朱香合(鶴桐時絵螺鈿飾棚付属)

堆朱楊成(二十代) 一点

堆朱  
径七・六 高一・六

蓋面に、一对の尾長鳥と、その周りに唐草文を配した香合で、朱漆を塗り重ねた素地を刀で浮彫りする堆朱の技法が用いられている。堆朱楊成家は、南北朝の頃、日本で初めて堆朱を造って後光厳天皇に献上し、姓名を賜ったのが、その始まりと伝えられている。その子孫は代々堆朱楊成を名乗り、堆朱の制作に携わった。

二十代楊成(一八八〇—一九五二)は、堆朱のほか、時絵を白山松哉に、彫刻を石川光明に学ぶなど幅広い素養を身につけ、それを作品制作の中に生かしていった。堆朱の他に、色漆を塗り重ねて彫り出した彫彩漆や、大胆な象嵌の作例も残している。

26-8 撫子時絵香盆(鶴桐時絵螺鈿飾棚付属)

鶴田和二郎(二代) 一点

木製漆塗  
縦二・四 横三・五 高三・六

朱色も鮮やかな漆塗の上に撫子と笹、流水と岩が高時絵であらわされた香盆。縁には銀覆輪を付け、底裏は梨子地とし、低い四脚を付ける。裏面に「信齋」の時絵銘、「鶴田」の朱漆銘がある。作者の二代鶴田和二郎(一八六六—?)は金沢の塗師の家に生まれた。初代(松齋)は名工として知られ、明治宮殿造営の際にも塗師として参加している。この作例から、二代和二郎は時絵の仕事にも携わっていたことがわかる。農展、一九二五年のバリ万国裝飾美術工芸博覧会など、内外の展覧会に出品してお

り、明治、大正期を中心に活躍した。

26-9 初音蘆手絵裁縫箱・裁縫道具(鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)

島田佳矣・木内半古ほか 一件

木製(桐)

(外箱)縦三三・六 横二四・二 高一・一

『源氏物語』の初音の帖「年月を松にひかれてふる人」今日鶯の初音きかせよ」の和歌に題材を得た裁縫箱。意匠の考案は島田佳矣が担当した。蓋面、側面にかけて、松や梅、鶯や流水を配し、歌文字を散らして蘆手絵としている。外箱の材は桐で、玳瑁や染めた鹿角、螺鈿、別材の木を象嵌して文様を表している。外箱の作者は木内半古(一八五五〜一九三二)で底裏に刻銘がある。

内部は、懸子に裁縫道具、箱の身の方には、畳紙を納める。裁縫道具は、和・洋鋏、鍔、針山、折尺、平・管糸巻、針入や巻尺、篋、白墨斗の一式が揃えられている。針山の納められた箱や、撥鏤の技法で加飾された牙尺は木内半古が、鋏や鍔、銀製で彫金の施された巻尺、針入は市島昌邦、玳瑁の糸巻き、白墨斗などの蒔絵は堀井正文、畳紙は吉村忠夫が担当している。

箱や牙尺を担当した木内半古は、明治二十六年より正倉院御物整理に木工家として携わり、奈良時代の工芸品の精華に接した。その技法や材料を研究して自らの作品に反映しており、本作品の象嵌や撥鏤の技法にもその成果が示されている。



箱底裏/銘

26-10 玳瑁文房具箱・文房具(鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)

島田佳矣・江崎栄造・安藤重壽 一件

玳瑁・七宝

縦三〇・三 横一五・〇 高九・五

蝶を散らした外箱に、万年筆やペーパーナイフ、インク壺、海面入れ、吸取り紙挟みの筆記用具の一式を納めている。意匠は島田佳矣、玳瑁で造られた外箱と万年筆のペン軸は江崎栄造、七宝製のインク壺等については安藤重壽が担当した。外箱、万年筆ともに、文様は金銀の象嵌で表されており、文房具が収まる身の部分や万年筆の軸には、桜と菊、巴文が散らされている。七宝製の四角は、籠目に菊花の意匠が色鮮やかに表されている。

26-11 化粧道具(鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)

島田佳矣・岩城倉之助ほか 一件

玳瑁・ガラス・陶磁ほか

(外箱)縦三九・五 横三五・九 高一・二

鏡、各種の櫛と、化粧水や香水、おしろいや紅などの化粧品を入れるための、こまごまとしたガラスの小瓶や磁器小箱、挽物の合子を揃えた化粧道具である。全体の意匠は島田佳矣が担当した。花の文様を中心としており、掌に収まるような小さな容器の数々には、繊細な可愛らしさが込められている。鏡背は銀製で、薔薇や鈴蘭、蝶などが表されており、作者は北原千鹿である。櫛は四種揃えられており、玳瑁製で、水仙、すみれ、撫子、菊の四季を表す花の文様が高蒔絵の技法で施される。蒔絵は竹森好文が担当した。ガラス瓶は、『御成婚奉祝献品図録』では《玻璃容器》の名称で記されている。全部で六個納められており、ひとつひとつの色彩は異なる。表面には各種の花がレリーフ状に表されており、その文様は、六個すべてが同形で、型押し技法が用いられている。

『御成婚奉祝献品図録』に作者として岩城倉之助の名前が記されていることから《玻璃容器》は岩城硝子製作所で制作されたと考えられる。その他、磁器の小箱は深川栄左衛門、挽物の合子の木地は筑城良太郎、蒔絵は辻石斎が担当している。

これらの化粧道具はすべて、六角形の外箱にコンパクトに納められているが、本展では、内容品のみを紹介することとした。

〈謝辞〉

本展覧会を開催するにあたり、資料調査等では内田篤典、塩谷純、高尾曜、土井久美子、永島明子、西村毅の各氏には御配慮、御教示を頂きました。また、左記の機関には御協力を頂きました。記して深謝いたします。

東京国立博物館、徳川黎明会、徳川美術館(株)象彦

(敬称略・順不同)

● 一般書籍

- 『御成婚奉祝献品図録』昭和四年  
 六角紫水『東洋漆工史』雄山閣 昭和七年  
 山中定次郎『棚物集成』藝苑社 昭和八年  
 『京漆器』光琳社 昭和五十八年  
 荒川浩和『近代日本の漆工藝』京都書院 昭和六十年  
 田中喜男『金沢の伝統文化』日本放送出版協会 昭和四十七年  
 小泉和子『室内と家具の歴史』中央公論社 平成七年  
 川本重雄・小泉和子『類聚雜要抄指図巻』中央公論美術出版 平成十年  
 『日本古典文学全集』小学館 昭和四十六年  
 『新編国歌大観』角川書店 昭和五十八年

● 報告書・機関誌等

- 『第二回内国勸業博覧会出品目録』内国勸業博覧会事務局 明治十四年  
 『第二回内国勸業博覧会報告書』農商務省博覧会掛 明治十六年  
 『第四回内国勸業博覧会審査報告』内国勸業博覧会事務局 明治二十九年  
 『日本漆工会雑誌』明治三十三年～昭和二年  
 『東京彫工会展覧会報告』第三十一回・三十二回 東京彫工会 大正七年・八年  
 『日本漆工会会報』第三三二号 昭和三年  
 『日本漆工』十六～二十一号 昭和二十五～二十六年

● 展覧会図録等

- 『農商務省圖案及应用作品展覧会図録』農商務省 大正二年～大正七年  
 『農商務省工芸展覧会図録』農商務省 大正八年～大正十一年  
 『東京大正博覧會美術館出品図録』東京府 大正三年  
 『第十二回朝鮮美術展覧会図録』朝鮮写真通信社 昭和八年  
 『木工芸』明治から現代まで』東京国立近代美術館 昭和六十二年  
 『婚礼』徳川美術館蔵品抄 徳川美術館 平成三年  
 『香の文化』徳川美術館 平成八年  
 『近世工芸の華 婚礼のいろとかたち』京都文化博物館 平成九年  
 『大名家の婚礼 お姫さまの嫁入り道具』仙台市博物館 平成十二年

● 論文等

- 木村弘道『蒔絵師・大垣昌訓』『金沢美術工芸大学学報第11号』昭和四十二年  
 『別冊資料編金沢工人系譜』金沢漆芸会 昭和六十三年  
 『金沢の近代工芸史研究』金沢美術工芸大学 美術工芸研究所 平成七年  
 『金沢の近代工芸史研究 補遺 金沢漆器の動向』金沢美術工芸大学 美術工芸研究所 平成七年  
 高尾曜『近世蒔絵師銘鑑—印籠蒔絵師を中心に—』『緑青』十八号 マリア書房 平成七年  
 『調査研究報告書 温知図録』東京国立博物館 平成九年  
 松原龍一『大正十三年の皇太子御成婚奉祝献品の御棚飾をめぐる』『三の丸尚蔵館年報・紀要』第5号 平成十二年

# 出品目録

前期：9月29日(土)～10月21日(日) 中期：10月27日(土)～11月18日(日) 後期：11月23日(金)～12月9日(日)

出品番号 作品名

作者名

数量

制作年代

技法・材質

寸法

展示期間

## 江戸の蒔絵棚と棚飾りの諸道具

1	松竹梅蒔絵棚		一基	江戸時代(十八世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦四四・七	横九八・五	高七五・五	中期
2	近江八景蒔絵棚		一基	江戸時代(十八世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦四三・六	横九〇・七	高八五・五	前期
3	四季耕作図蒔絵棚	古満巨柳	一基	江戸時代(十八世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦四〇・二	横九五・七	高八一・五	後期
4	菊花紋散蒔絵厨子棚		一基	江戸時代(十八～十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦三九・〇	横九七・七	高七二・二	中期・後期
5	菊花紋散蒔絵黒棚		一基	江戸時代(十八～十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦三七・三	横七七・五	高七〇・〇	中期・後期
6	扇流蒔絵棚		一基	江戸時代末期～明治初期(十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦四二・五	横八八・〇	高七八・〇	前期
7	菊山水蒔絵棚		一基	江戸時代～明治初期(十九世紀)	木製漆塗、蒔絵、彫金、螺鈿	縦三四・五	横六八・五	高六八・〇	後期
8	流水松竹梅蒔絵冠棚		一基	江戸時代(十八～十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦三五・三	横六五・六	高四五・八	前期
9	海辺松桜蒔絵冠棚		一基	江戸時代末期～明治(十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦三五・二	横六四・五	高四三・九	中期
10	菊花散蒔絵十種香道具		一件	江戸時代(十八世紀)	木製漆塗、蒔絵	(外箱)縦三一・二	横二四・六	高一九・三	後期
11	忍草蒔絵短冊箱		一点	江戸時代(十八世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦四四・九	横一二・二	高八・八	前期
12	菊花折枝蒔絵文箱		一点	江戸時代(十八～十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦三七・〇	横二五・八	高一五・三	中期
伝統の継承と近代の意匠									
13	鳳凰唐草春草蒔絵棚	新井半十郎・川之邊一朝ほか	一基	明治十四年(一八八一)	木製漆塗、蒔絵	縦六一・八	横一〇七・五	高九〇・六	中期
14	四季草花蒔絵棚	佐々木高保	一基	明治二十八年(一八九五)	木製漆塗、蒔絵	縦四〇・〇	横八三・五	高八三・九	前期
15	秋草流水蒔絵螺鈿棚	川之邊一朝	一基	明治二十八年(一八九五)	木製漆塗、螺鈿	縦三六・二	横八〇・七	高六一・六	前期
16	菊蒔絵螺鈿棚	川之邊一朝ほか	一基	明治三十六年(一九〇三)	木製漆塗、蒔絵、螺鈿	縦四六・八	横一三五・五	高二二・〇	前期
17	山水筏流蒔絵棚		一基	明治(十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦三三・五	横七〇・五	高五九・七	前期
18	桑木地飾棚	伊藤平左衛門	一基	明治四十年(一九〇七)	木製(桑)	縦四一・七	横九七・五	高九二・二	中期・後期
19	1 鶴亀置物	高村光雲・竹内久一	一对	明治四十年(一九〇七)	木彫、彩色	高一八・四			中期・後期
19	2 桜花白磁香炉	清風與平	一点		陶磁	径一二・五	高一一・六		中期・後期
19	3 双蝶七宝香合	清川惣助	一点		七宝	縦六・四	横六・七	高二・四	中期・後期
19	4 古今集蘆手蒔絵香盆	川之邊一朝	一点		木製漆塗、蒔絵	縦二五・八	横三三・六	高二・九	中期・後期
19	5 牡丹折枝印篋笥鏡板	海野勝珉	一点		彫金	縦一一・二	横一九・三	高一八・八	中期・後期
19	6 獅子鈕銅印	鈴木長吉・中井敬所	三顆		銅鑄製	高九・四			中期・後期
19	7 龍青華肉池	宮川香山	一点		陶磁	径一〇・〇	高三・一		中期・後期

19   8	松波蒔絵硯箱	白山松哉	一点		木製漆塗、蒔絵	縦二四・六 横三二・五 高四・八	中期・後期
19   9	蛇籠千鳥水滴	香川勝廣	一点		銀製、彫金	縦二・五 横六・一 高一・四	中期・後期
19   10	鹿鎮子	石川光明	一点		牙彫	高一・〇	中期・後期
19   11	古今集歌絵畫帖	川島甚兵衛・荒木寛政ほか	一帖		綴錦、絹本着色	縦三〇・四 横三六・五 高五・五	中期・後期
20	若松菊山水蒔絵棚		一基	明治(十九〜二十世紀)	木製漆塗、蒔絵	縦三七・五 横七一・〇 高六七・二	前期
21	網代葛蒔絵棚	大垣昌訓	一基	大正三年(一九一四)	木製漆塗、蒔絵、七宝	縦四〇・三 横八七・〇 高七八・五	後期
22	楼閣山水木彫堆黒棚		一基	明治〜大正(十九〜二十世紀)	木製漆塗	縦四〇・八 横八九・〇 高七七・七	前期
23	桑木地透彫棚	前田南齊	一基	大正四年(一九一五)	木製(桑)	縦二八・九 横五八・一 高五五・二	中期・後期
24	舞楽蒔絵棚	西村彦兵衛	一基	昭和三年(一九二八)	木製漆塗、蒔絵	縦四六・二 横二〇・八 高一三・〇	中期・後期
25	牡丹螺鈿棚	五十嵐三次	一基	昭和八年(一九三三)	木製漆塗、螺鈿、蒔絵	縦三三・五 横九六・二 高六五・〇	中期・後期
26	鳳凰蒔絵螺鈿飾棚・鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属飾り			昭和三年(一九二八)			
26   1	胡俗楽苑七宝飾皿 (鳳凰蒔絵螺鈿飾棚付属)	稲葉七穂	一点		七宝	径二四・九 高一・二	前期・中期
26   2	膝菖蒲螺鈿軸盆 (鳳凰蒔絵螺鈿飾棚付属)	豊川楊溪	一点		木製漆塗、螺鈿	縦三八・一 横一三・九 高二・八	前期
26   3	玳瑁化粧具箱・化粧道具 (鳳凰蒔絵螺鈿飾棚付属)	森田佳鳳・江崎栄造	一件		玳瑁	縦三一・六 横三五・四 高九・五	後期
26   4	襦 (鳳凰蒔絵螺鈿飾棚付属)	山鹿清華	十二点		絹・綿・革ほか		前期
26   5	春秋刺繍写真立 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	渡邊松華・黒田橘郎	一对		絹、刺繍	縦二四・二 横一八・一	後期
26   6	宝相華磁器香炉 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	石野龍山	一点		陶磁	径一一・八 高一〇・六	中期
26   7	双鳥堆朱香合 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	堆朱楊成	一点		堆朱	径七・六 高二・六	中期
26   8	撫子蒔絵香盆 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	鶴田和三郎	一点		木製漆塗	縦二四・五 横三三・五 高三・六	中期
26   9	初音箴手絵裁縫箱・裁縫道具 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	島田佳矣・木内半古ほか	一件		木製(桐)	(外箱)縦三三・六 横二四・二 高一・一	中期・後期
26   10	玳瑁文房具箱・文房具 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	島田佳矣・江崎栄造・安藤重壽	一件		玳瑁・七宝	縦三〇・三 横一五・〇 高九・五	後期
26   11	化粧道具 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	島田佳矣・岩城倉之助ほか	一件		玳瑁・ガラス・陶磁	(外箱)縦三〇・五 横三五・〇 高一・二	中期
26   12	襦 (鶴桐蒔絵螺鈿飾棚付属)	山鹿清華	十点		絹・綿・革ほか		前期

宮中の調度―棚と棚飾り

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 26

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 横溝廣子  
発行 宮内庁  
平成十三年九月二十九日発行

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

宮中の調度―棚と棚飾り

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 26

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十三年九月二十九日発行

©2001, Museum of the Imperial Collections

- 19-6  
Bronze seal with lion shaped stem  
By Suzuki Chōkichi and Nakai Keishō  
Cast bronze  
H.9.4
- 19-7  
Seal pad case with design of dragon  
By Miyagawa Kōzan  
Porcelain, cobalt underglaze  
Diameter 10.0 H.3.1
- 19-8  
Writing box with design of pine tree and waves  
By Shirayama Shōsai  
Lacquered wood, *makie*  
D.24.6 W.22.5 H.4.8
- 19-9  
Water dropper with design of gabbions and plovers  
By Kagawa Katsuhiko  
Silver  
D.2.5 W.6.1 H.1.4
- 19-10  
Deer shaped weight  
By Ishikawa Mitsuaki  
Ivory  
H.11.0
- 19-11  
Poem picture album of the Kokinshū anthology  
By Kawashima Jimbei, Araki Kanpo and others  
Brocade, pigments on silk  
D.30.4 W.36.5 H.5.5
20.  
Cabinet with design of young pine, chrysanthemum and landscape  
Meiji period, 19-20th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.37.5 W.71.0 H.67.2
21.  
Cabinet with design of wickerwork and ivy  
By Ōgaki Shōkun  
1914  
Lacquered wood, *makie*, cloisonné  
D.40.3 W.87.0 H.78.5
22.  
Cabinet with design of pavilion and landscape  
Meiji period to Taishō period, 19-20th century  
Carved and black lacquered wood  
D.40.8 W.89.0 H.77.7
23.  
Mulberry wood cabinet with openwork  
By Maeda Nansai  
1915  
Mulberry wood  
D.28.9 W.58.1 H.55.2
24.  
Cabinet with design of *Bugaku* dance  
By Nishimura Hikobei  
1928  
Lacquered wood, *makie*  
D.46.2 W.120.8 H.122.0
25.  
Cabinet with peony design  
By Igarashi Sanji  
1933  
Lacquered wood, *makie*, mother of pearl inlay  
D.33.5 W.96.2 H.65.0
26.  
Cabinet with design of phoenix and chrysanthemum  
Cabinet with design of crane and paulownia  
1928
- 26-1  
Decorative plate with design of Idyllic Persian Garden (accompanying the Cabinet with design of phoenix and chrysanthemum)  
By Inaba Shichiro  
Cloisonné  
Diameter 24.9 H.2.2
- 26-2  
Scroll tray with design of wisteria and iris (accompanying the Cabinet with design of phoenix and chrysanthemum)  
By Toyokawa Yōkei  
Lacquered wood, mother of pearl inlay  
D.38.1 W.13.9 H.2.8
- 26-3  
Cosmetic box (accompanying the Cabinet with design of phoenix and chrysanthemum)  
By Morita Kahō and Kōzaki Eizō  
Tortoise shell  
D.31.6 W.35.4 H.9.5
- 26-4  
Mat (accompanying the Cabinet with design of phoenix and chrysanthemum)  
By Yamaga Seika  
Silk, cotton and leather
- 26-5  
Photograph frame with design of Spring and Autumn (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)
- By Watanabe Shōka and Kuroda Kisson  
Silk, embroidery  
D.24.2 W.18.1
- 26-6  
Incense burner with design of *hōsōge* flower (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)  
By Ishino Ryūzan  
Porcelain  
Diameter 11.8 H.10.6
- 26-7  
Incense caddy with design of birds (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)  
By Tsuishu Yōzei  
Carved and lacquered wood  
Diameter 7.6 H.2.6
- 26-8  
Incense tray with design of wild pinks (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)  
By Tsuruta Wasaburō  
Lacquered wood  
D.24.5 W.33.5 H.3.6
- 26-9  
Sewing box and sewing set with design of *Hatsune* (The First Warbler, from The Tale of Genji) and characters (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)  
By Shimada Yoshinari, Kiuchi Hanko and others  
Paulownia wood  
(Outer box) D.33.6 W.24.2 H.11.1
- 26-10  
Stationary box and stationary (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)  
By Shimada Yoshinari, Kōzaki Eizō and Andō Shigetoshi  
Tortoise shell and cloisonné  
D.30.3 W.15.0 H.9.5
- 26-11  
Cosmetic box (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)  
By Shimada Yoshinari, Iwaki Kuranosuke and others  
Tortoise shell, glass and ceramics  
(Outer box) D.30.5 W.35.0 H.11.2
- 26-12  
Mat (accompanying the Cabinet with design of crane and paulownia)  
By Yamaga Seika  
Silk, cotton and leather



# List of Exhibits

## Makie Cabinets of the Edo Period and their Ornaments

1.  
Cabinet with design of pine, bamboo and plum blossom  
Edo period, 18th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.44.7 W.98.5 H.75.5
2.  
Cabinet with design of eight scenes of Ōmi  
Edo period, 18th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.43.6 W.90.7 H.85.5
3.  
Cabinet with design of farming scenes of the four seasons  
Edo period, 18th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.40.2 W.95.7 H.81.5
4.  
Cabinet for incense utensils with design of chrysanthemum crest  
Edo period, 18-19th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.39.0 W.97.7 H.72.2
5.  
Cabinet for toiletry articles with design of chrysanthemum crest  
Edo period, 18-19th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.37.3 W.77.5 H.70.0
6.  
Cabinet with design of fans in flowing water  
Late Edo period to early Meiji period, 19th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.42.5 W.88.0 H.78.0
7.  
Cabinet with design of chrysanthemums and landscape  
Late Edo period to early Meiji period, 19th century  
Lacquered wood, *makie*, metalwork, mother of pearl inlay  
D.34.5 W.68.5 H.68.0
8.  
Crown Cabinet with design of pine, bamboo and plum blossoms, and flowing water  
Edo period, 18-19th century  
Lacquered wood, *makie*

- D.35.3 W.65.6 H.45.8
9.  
Crown Cabinet with design of pine, cherry blossom and seashore  
Late Edo period to Meiji period, 19th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.35.2 W.64.5 H.43.9
  10.  
Covered box for incense game utensils with design of chrysanthemums  
Edo period, 18th century  
Lacquered wood, *makie*  
(Outer box) D.32.2 W.24.6 H.19.3
  11.  
Box for calligraphy paper with design of hare's foot fern  
Edo period, 18th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.44.9 W.12.2 H.8.8

12.  
Letter box with design of chrysanthemum sprays  
Edo period, 18-19th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.37.0 W.25.8 H.15.3

## Succession of Tradition and Modern Designs

13.  
Cabinet with design of phoenix, arabesques and spring grasses  
By Arai Hanjūrō, Kawanobe Ichchō, and others  
1881  
Lacquered wood, *makie*  
D.61.8 W.107.5 H.90.6
14.  
Cabinet with design of flowers and grasses of the four seasons  
By Sasaki Takayasu  
1895  
Lacquered wood, *makie*  
D.40.0 W.83.5 H.83.9
15.  
Cabinet with design of Autumn grasses and flowing water  
By Kawanobe Ichchō  
1895  
Lacquered wood, *makie*, mother of pearl inlay  
D.36.2 W.80.7 H.61.6

16.  
Cabinet with design of chrysanthemums  
By Kawanobe Ichchō and others  
1903  
Lacquered wood, *makie*, mother of pearl inlay  
D.46.8 W.135.5 H.122.0

17.  
Cabinet with design of landscape and drifting rafts  
Meiji period, 19th century  
Lacquered wood, *makie*  
D.33.5 W.70.5 H.59.7

18.  
Mulberry wood cabinet  
By Itō Heizaemon  
1907  
Mulberry wood  
D.41.7 W.97.5 H.92.2

19.  
Ornaments to be displayed on the Mulberry wood cabinet (no.18)  
1907

- 19-1  
Crane and tortoise  
By Takamura Kōun and Takenouchi Hisakazu  
Pigments on wood  
H.18.4

- 19-2  
Incense burner with design of cherry blossoms  
By Seifū Yohei  
White porcelain  
Diameter 12.5 H.11.6

- 19-3  
Incense caddy with design of butterflies  
By Namikawa Sōsuke  
Cloisonné  
D.6.4 W.6.7 H.2.4

- 19-4  
Incense tray with design of characters from the Kokinshū anthology  
By Kawanobe Ichchō  
Lacquered wood, *makie*  
D.25.8 W.33.6 H.2.9

- 19-5  
Panel at the top of seal chest with design of peony sprays  
By Unno Shōmin  
Metal carving  
D.11.2 W.19.3 H.18.8

## Foreword

Cabinets have played an important part among the Japanese interior decorations since old times, not only for practical use as storage and to display ornaments, but also as one of the furnishings decorated themselves with *makie*, relief, metal ornaments, etc.

There are a large number of cabinets passed down within the Imperial Court in our Museum collection. They were created between the late Edo period to early Shōwa periods, in various styles and designs. The cabinets of the late Edo period were used daily rather than in court events, and show the traditions of wedding furnishings. In modern times, works created either according to Imperial order, purchased at exhibitions, gifts to the Imperial family on auspicious events were added to the Imperial collection. Among them are lacquer pieces that represent modern lacquer art created with the essence of skill of the era. Furthermore in this era, there are examples characterized by their accompanying objects, to be displayed exclusively.

In this exhibition, we will display these cabinets and their ornaments. We hope you will enjoy the variety of designs and superior techniques of each piece while perceiving the transition in furniture styles over the times.

September, 2001

Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan

*(Translated by Hiroko Yokomizo)*



**Interior Decoration of the Imperial Court**

— *Cabinets and their Decor* —

**Museum of the Imperial Collections**  
Sannomaru Shōzōkan